薄して魚雷を叩きつけた。

一瞬にして轟沈するもの、火を噴いて傾くもの、逆立ちになつて沈みかゝつてゐるもの、乘艦を見棄ててバラ〳〵と寒波の中に飛びこむもの――威海衛港内はこの世ながらの地獄圖繪を露呈した。

黄海の大海戰で、危く一命を拾つた旗艦定遠は、漸く修理ができて戰鬪に堪へうるやうになつてゐたが、乘組員は全く戰意を喪失してしまつたので、艦長劉步蟾は大いに憤慨し、

「もはや、わが事終れり。」

と、悲痛な言葉を遺して、自ら定遠を爆發させ、彼はその場でピストルを眉間にあてゝ自殺した。

水雷艇の夜襲は、次ぎの日の八日も繰返へされた。敵艦の數は、七日の夜襲よりもずツと少くなり、殘つた軍艦も、もはや戰意を喪つたものゝ如く、第一夜の襲擊の時のやうな反擊もしなくなつた。周邊の砲臺もわが海軍砲や陸軍の巨砲に擊たれて、殆んど沈默してしまつた。

いよ〳〵敵の斷末魔が近づいてきたことを思はせる。

花も實もある日本武士

二月十一日、威海衛封鎖中のわが艦隊は、質素ながらも極めて愉快な紀元節奉祝の式典を擧げはるかに東天を拜して皇國の彌榮と、神明の加護を祈つた。

その翌朝――十二日午前七時ごろ、敵の軍艦が一隻、威海衛の港口を出てわが艦隊の方へ進んできた。白旗を掲げた砲艦鎭北である。

（いよ〳〵降伏だな。）

わが艦隊の將士は、その孤影悄然たる姿を打眺めながらかう思つた。

鎭北は、わが旗艦松島の舷側に横づけして、海軍少佐程璧光が、伊東中將に宛てた丁汝昌の乞降書を持つて松島の甲板へ上つてきた。

伊東中將は、自らこれを引見して、鄭重にもてなしながらその乞降書を展いた。

その乞降書卽ち降伏書には左のやうなことが書いてあつた。

本官は飽まで決戰し、艦沈み、人絕へて後已まんと思ひしが、百千の生靈を奪ふに忍びず、艦

船及び劉公島並に砲臺兵器を、貴軍に獻ずるが故に戰を停め、兵員を許して、各々故郷に歸らしめ、以てその生を完うせしめんことを切望す。

これらの諸件を承允せらるゝにおいては、英國艦隊司令長官を以て證人となすべし。冀くば高諒を賜へ。

「武士と武士との約束だ。イギリス人の證人など要るものか。」

伊東中將は、かう言つてさつそく左のやうな意味の返書を認めて程少佐に託した。

貴簡の趣諒承す。

軍器一切引渡濟みの上は、我が軍艦を以て貴官以下の諸將兵を警護し、適宜の地點まで護送すべし。然し、前書に於て申せし如く、貴國の爲めにも、將又貴官の爲めにも、本戰爭の終局まで貴官は我が國に來遊される方好都合ならんと勘考するも、思召なしとあらば、敢て貴意を枉げらるゝにも及ばず。

尙、英國艦隊司令長官を、證人となさんとの申出では、全くその必要なしと認む。何となれば小官は貴官の武人たる點に全幅の信賴を置くが爲めなり。

と、先に送つた書狀と少しも變らぬ禮と友情を披瀝し、さらにこの返書に添へて、陣中見舞の意を表する酒と果物とを贈つた。

丁提督は、伊東中將の花も實もある日本武士の友情に泣いて感激し、

貴官の理解と同情とにより、多數の生靈が救はるゝことを衷心より感謝す。今後の一切の處置は貴官に委託す。御惠贈の品物は有難く存ずるが、目下兩國有事の際なれば私受し難し。謹みてこれを返上し、たゞその御厚意を謝す。

といふ意味の返書を認め、

「これを、明十三日伊東中將に屆けてくれたまへ。」

と、程少佐に命じて、伊東中將の贈物と共に手渡した。

敵將の悲運を劬はる

翌十三日の朝、忠實なる副官程璧光は、伊東中將を訪問する前に、丁提督に出發の挨拶をするため、その官舍の提督居室を訪れた。

いつになく、室内から鍵がかゝつてゐるので、輕くノックをしながら、

「閣下、程少佐であります。」

と聲をかけたが返事がない。彼は二度、三度大きな聲で呼んでみたが、何の答へもない。瞬間彼の頭をある不吉な豫感が走つた。そこで彼は同僚や部下たちを呼んできて、扉を叩き破つて提督の寢室に駈けこんだ。

「呀ッ！」

程も、同僚も、部下も立ちすくんだ。

提督は、口から血を吐いて、寢臺から轉げ落ちてゐるではないか。

「閣下、閣下、しつかりしてください。閣下に若ものことがあつたら、清國水師の再建は駄目になつてしまひます。」

程は、提督の體を抱きあげながら叫んだ。だが、もう提督の體は氷のやうに冷めたくなつてしまつてゐた。

丁汝昌は、程副官が辭去したあとで、毒を仰いで自殺したのであつた。

別に遺書もなかつたので、その自殺の理由は明かでないが、いふまでもなく日清海戰の大敗の責任を負うて自決したことは誰にも分つた。しかも彼は、伊東中將の溫い友情によつて、その部下たちの生命の安全が保障されたことに滿足して死んだであらう。

まことに衰れな敗軍の將の末路ではあるが、しかしこれを大東亞戰爭における香港、シンガポール、ジャバなどの敗軍の將が、わが軍の條理をつくした溫情あふるゝ降伏勸告狀にも煮えきらず、さりとて自決もできず、たゞ生き延びたいといふ生命慾のためにむざ〳〵捕虜となつて、しかも洒々と濟しかへつてゐる態度に比べると、どれほど男らしいか分らぬ。

丁汝昌は、青年時代に英國に留學して海軍を研究し、歸國後は李鴻章が創設した北洋水師（艦隊）の提督となり、さきに相次いで自殺した鎭遠艦長林泰曹、定遠艦長劉步蟾とともに清國海軍の三偉傑と稱されてゐたほどの傑物であつた。しかもこの三人は、揃ひも揃つて、清國よりも、日本の方に却つて本當の知己があつた。

伊東中將は、程少佐が涙ながらに語る丁提督自殺の顚末を聞くと、

「敵ながらも天晴れな最期だ。……あゝ惜しい名將を失つた。」

と、暗然として心から丁汝昌の死を悼んだ。

そして、わが全艦隊に對し、儀式以外には一切奏樂をしないやうに命じて、東洋的武士としての立派な最期を遂げた敵將のために弔意を表した。

それから、丁提督の靈柩を芝罘に移送することになつて、薄汚い一艘のジャンクに搭載するといふことを聞いた伊東中將は、

「それは氣の毒だ。本來ならば盛大な海軍葬が營まれるのであるが、いかに敗軍の將とはいへ、ジャンクなんかで移送するのは可愛さうだ。左樣な非禮なことをするのを、日本武士として看過するに忍びない。」

と言つて、すでに我が海軍の管理下にある敵の運送船康濟號を用ゐることを許した。

伊東司令長官が、降伏勸告狀を送つて以來、その靈柩の世話までして、丁汝昌に對する溫情を示したことは、決して相手の氣を引くための作意でもなく、また勝利者が敗北者に對する優越的な憐憫からきたものでもない。それは、戰ひに臨んでは鬼をも挫く勇猛心の反面に、矢つき、刀折れた敵を劬る日本武士の傳統的精神の發露に外ならぬ。

清國の海軍も陸軍も、このことを傳へ聞いて、いまさらの如く伊東中將の偉大な人格を讃仰し敷賞したのであつた。

この威海衞の陷落によつて、わが海軍は敵の殘存軍艦鎭遠、平遠、濟遠以下十隻を拿捕し堂々たる大戰果を收めた。

黃海海戰と威海衞の攻略には、後年帝國海軍の元帥や大將などの首腦者となつて、帝國海軍の强化擴充に大きな貢獻をした人々が少くなかつた。

すなはち浪速には艦長東鄕平八郎大佐（元帥）と、航海長有馬良橘大尉（大將）岡田啓介少尉（大將）吉野には砲術長の加藤友三郎大尉（元帥）水雷長村上格一大尉（大將）吉田茂太郎大尉（大將）井田謙治少尉（大將）高千穗には八代六郎大尉（大將）が乘組んでゐて大いに奮戰した。

そしてこれらの人々は、日本海大海戰のさいには、軍令部長（伊東）として、あるひは聯合艦隊司令長官（東鄕）として、あるひは艦長（八代其他）として、あるひは參謀長（加藤）その他中堅的存在として、あの曠古の大海戰で大勝を博したのであつた。そしてその大勝を得た戰鬪に

は日清海戰における貴重な體驗を活かしたものであつた。

しかも、これら先輩の尊い體驗と教訓は、こんにち帝國海軍が承けついで、ます〳〵磨きがかゝつてきたのである。強い筈だ。

至誠智慧に勝る

北洋艦隊を、根こそぎに撲滅したわが聯合艦隊は、黃海一帶の制海權を完全に掌握したが、清國艦隊としては、まだ福建、廣東、南洋の三大艦隊が殘存してゐたので、伊東聯合艦隊司令長官は明治二十八年三月十九日、本隊と遊擊隊を率ゐて佐世保を出發し、一路臺灣に向つた。

だが、豫期したやうな敵艦隊の抵抗もなく、わが艦隊は陸軍と協力して澎湖島を占領し、南支那海の制海權を握つた。

しかし、こゝに恐しい敵が現れた。

それは清國の軍隊ではなく、眼に見えぬ敵、コレラ菌であつた。海軍の罹病者はあまりなかつたが、陸に上つて臺灣や澎湖島の水を飲み、野菜を食ひ、魚を食つた陸兵には多數の罹病者ができて、陣歿するものも少くなかつた。だが、これも間もなく防ぎ止めた。

この頃、下の關の春帆樓では日清媾和談判が開かれてゐた。

清國は最初、蕞爾たる島帝國何するものぞと、日本を極度に見縊つてゐたが、いよ〳〵戰端を開いてみると、日本軍は陸に海に破竹の進擊をなして清國陸海軍を破り、陸軍はまさに北京を衝かんとし、海軍は北洋艦隊を殲滅して黃海はもちろん南支那一帶の制海權を握つて、清國の軍事的、經濟的生命線を抑へてしまつた。

清國は、この上戰つたならば、もはや國家の滅亡を來たすよりほかないと慌てだした。そこで遂に媾和を申入れて、その全權李鴻章を日本に送つたのであつた。

李鴻章は春帆樓の談判から旅館に歸る途中で、小山某のためにピストルで狙擊されて、一時談判も行きなやみの狀態となつたが、間もなく恢復して、わが全權大使伊藤博文（總理大臣）、陸奥宗光（外務大臣）と會見して商議を行ひ、李鴻章は全面的にわが方の提案を容れ、こゝに日清戰爭は全く終結した。時に明治二十八年四月十七日であつた。

この談判で、表面に立つたのは伊藤博文であつたが、その智慧袋として、また鞭達者として人

知れぬ苦勞と奮鬪をしたのは陸奥宗光であつた。陸奥がゐたからこそ、老獪な李鴻章を向ふにまはして、この談判をわが國に有利に導いたと傳へられてゐるくらゐだ。

陸奥はその青年時代、伊達陽之助といふ名で、勝海舟の兵庫海軍操練所に入り、伊東祐亨とは一しよに机を並べて勉强した仲間である。

そして、一は帝國艦隊の總指揮者として赫灼たる武勳を樹て、一つは外務大臣としてその後始末にあたり、素晴らしい成果をあげたのである。

これもまた奇しき緣といふべきだ。

伊東聯合艦隊司令長官は、媾和が成立した後も、しばらく南支那海方面の警備にあたつてゐたが、すでにその必要がなくなつたので、麾下の艦隊を率ゐて堂々と佐世保に歸還した。

艦隊が九州の陸地に近づくと、沖に出漁してゐた數知れぬ小さな漁舟の漁師たちは、早くもそれと知つて、鉢卷をとつて、ちぎれるばかり打振りながら萬歲を叫んだ。

滿目新綠に蔽はれた故國の漁村や、農村や、町には、日の丸の旗が爽かな初夏の空に飜つて戰ひ勝つて歸る勇士たちを祝福してゐる。

「日本に生れてよかつたのう。」

艦橋に立ちつくして、この情景を飽かず眺めてゐた伊東中將は、胸に突きあげてくる激情を抑へながら、傍の參謀をかへりみて泌々と言つた。

◇

伊東祐亨は、日清海戰の功によつて子爵を授けられ、明治三十一年には日本で三番目の海軍大將に昇進した。

海軍大將になつた一番の人は西鄕從道、二番目が樺山資紀であるが、この二人は陸軍の將官から轉じた人であるから、生えぬきの海軍として大將になつた人は、伊東提督が最初である。

日露戰爭の際には、軍令部長として帷幕の中に大きな功績をあげ、戰爭終結後の明治三十八年に元帥に列し、翌年伯爵を授けられ、大正二年には大勳位に敍せられた。

往年、勤皇討幕の運動に身を投じて幕吏に追はれ、身の置きどころさへなかつた彼が、いまは世にも時めく元帥伯爵として、帝國の柱石となつたのである。

人の運命といふものは計りがたいものだ。彼が金次郎又は四郎と稱した少年時代に、薩摩少年

學校や英學校に學んでゐたころは、學業の方はあまり得意でなく、相撲と擊劍だけがやゝ見るべきものがあつたので、父の祐典は四男金次郎の將來については全く期待をかけず、むしろ異母兄の長男祐麿に大きな期待をかけてゐた。

尤も、祐麿も海軍中將まで榮進したが、あまり期待をかけられなかつた金次郎の方が却つて偉くなつた。

取りたてゝ頭腦が優れてゐなかつた彼が、多くの「頭腦明敏者」を拔いて英名一世に謳はるゝにいたつたのは、彼が至誠一貫、君國のために身を挺して奮進した結果でなくて何であらう。

人の智慧には底があるが、至誠には底も天井もない。從つて無限大に伸びゆく譯だ。

伊東元帥は、大正三年一月十六日七十二歳で薨去した。けれども、その「至誠一貫」の敢鬪的精神はわが帝國海軍の血となり、肉となり、魂となつて生きてゐる。

大提督山本權兵衛

孜々として築いた無敵海軍の礎

大西郷に殉ずるため

「おはん達の言ふことは、おいどんにとつては嬉しいことだ。しかしおはん達の考へは間違つとる。」

西郷南洲は、その前に端然と坐つてゐる二人の青年——山本權兵衛と左近允隼太を見据ゑながら、靜かに煙管を喞へた。

「どこが間違つてをりますか。」

山本は、鄕黨の大先輩、いな日本の大先覺者の前をも憚らず、ふてぶてしい面魂をしながら

反問した。

南洲は、その人見知りをしないこの青年の態度を却つて頼母しく思ふやうに、

「ぢや、言つて聞かせよう。」

南洲は、火鉢の縁を叩いて煙管の吸殻を落しながら居ずまゐを直した。

明治七年三月のことで、場所は鹿兒島の城山山麓の厩跡に、この二月から新たに設けられた私學校の一室である。

南洲は、昨年（明治六年）の十月、征韓論に破れたのを機會に、參議、近衞都督の顯職を辭し、單なる陸軍大將として鄉里鹿兒島に歸り、鄉黨の青少年を教育するため私學校を設立した。

東京その他の各地にあつた薩州人は、征韓論に破れた南洲の無念やりかたなき胸中を察すると、ともに、岩倉具視、木戸孝允、大久保利通らの征韓反對論者を極度に憎み、南洲に殉ずるため官職を辭して續々と鹿兒島に歸つてきた。

陸軍少將桐野利秋、篠原國幹をはじめ池上四郎、別府晋介、永山彌一郎の各佐官、逸見十郎太、貴島清、別府九郎、淵部軍平らの各少壯士官は、南洲が東京引きあげと同時に辭職し、このほか

日本各地に散在してゐた軍人、官吏などは、相ついで鹿兒島へ歸つた。

そして彼等は、私學校の教官となり、あるひは南洲の賞典祿を基金として設けた小學校、幼年學校、開墾社などの教師又は指導者となつて、南洲再擧の日に備へた。

山本權兵衞と左近允隼太は、そのころ東京築地の官立海軍兵學寮に在學してゐたが、鄉黨の先輩や朋友が、南洲に殉じてぞく〳〵歸國するのを見て、じッとしてをれなくなつた。

だが、山本は單に南洲に殉ずるといふだけでなく、南洲らの唱へる征韓論こそ、日本の國是大亞細亞主義を實現する第一歩であるといふ信念と、烈々たる愛國の至情から、身を挺してその運動に參加しようと決心したのであつた。

この時、山本は已に二十二歳、しかも少年時代から京都御所の警衞、鳥羽伏見の戰、奥州庄內藩への遠征、函館五陵閣の戰などに參加し、鄉里の開成所や、昌平黌などに學び、その上、勝海舟の門下生として、その教へを受けてゐたので、一と通りの見識を備へてゐた。

征韓論といふ字面だけで解釋すると、いかにも武斷一方の侵略主義のやうであるが、南洲の主張した征韓論の本旨は、日本を指導者として東洋の平和を安定とするこんにちの大東亞共榮圏の

確立と全く同一の意味を有するものであつた。

だから、山本はこれに共感し、南洲を盟主としてその實現を期さうと考へ、そしてこの旨を南洲に告げたのであつた。

しかし、南洲からその考へは間違つてゐるといはれたので、どの點が間違つてゐるか、それを教へてもらひたかつた。

西郷の説示で翻意

「先づ權兵衞どんに訊くが、おはんが、わしの紹介狀を持つて、勝海舟先生に會ひに行つたのは、あれは何のためだつたかな。」

南洲は、維新の戰爭が終つて間もなく、その頃十七八歳の青年だつた山本が、南洲から海舟宛の紹介狀を持つて東京へ行つた時の話から持ち出した。

「勝先生の教訓をうけて、立派な海軍々人になりたいといふ目的でした。」

山本は、その時の心境を卒直に答へた。

「それから、藩の推選で海軍兵學寮に這入つたのは？」

「やつぱり海軍になるためでごわした。」

「さうだらう。ところで、いま鹿兒島に歸つてその目的が達せらるゝと思ひなさるか。」

「それは……」

さすがの山本も言ひ淀んだ。左近允も同樣であつた。

南洲は、言葉を改めて嚴かに言つた。

「日本が、こんにち歐米諸國に立遲れてゐるのは、德川幕府による長い間の鎖國で、海軍が發達しなかつたためである。しかるに、歐米諸國は日本に海軍力のないことに乘じて、この頃さかんにわが國の邊彈を窺ひ、あるひは政府に向つて無理な難題を持ちこんでゐる。清國や韓國までが日本を輕視してゐる。この結果、どうしても將來歐米や清國と一戰を交へなくてはならぬと思ふが、その時海軍力がなかつたら何うなるか。幸ひ、日本の陸軍は相當の實力を備へてきたが、海軍はまだお話にならぬほど幼稚なものであることは、諸君も承知の筈だ。四面環海の日本は、攻めるにも守るにも、やはり海に據らねばならぬ。そのためには先づ强力な海軍を建設することが、

最大緊要である。諸君はそのために、こんにち勉強してゐるのだ。その勉強を棄てゝ鄉里に引きあげることは、決して君國に忠なるものではない。」

南洲はなほ海軍力の旺盛な國家は榮え、これが衰微した國家が衰亡した實例をあげ、あるひは世界の大勢を說き、諄々として有爲なる青年は須らく海に志すべきであることを述べて、速かに東京の兵學寮へ歸ることをすゝめた。

世上、この會見について、南洲はたゞ頭ごなしに二人の青年を叱りつけて追ひかへしたやうに傳へられてゐるが、確實な史料によると、南洲はこの前途有爲な青年、なかんづく山本のために切々と說いて、歸校を促したといふのが事實である。

南洲は、それだけ山本の將來について望をかけてゐた譯だ。

山本は、大南洲の說示に飜然として覺り、海軍のため全身全靈を打込む決心を固め、「將來必ず帝國海軍のために粉骨碎身する」ことを誓つて、直ちに東京へ歸つた。

しかし、左近允は、あくまで鹿兒島に踏み止まると頑張つたが、南洲の言葉に從つて、山本を京都まで見送ることになつた。

南洲の肚は、左近允も京都まで一緒に行けば、やはり山本と一しよに東京へ歸へるものと見ての仕儀であつたが、左近允は初志をひるがへさず、京都で山本と別れる間際になると、

「きさまは裏切者だ。こゝでいさぎよく刺し違へよう。」

と騷いだ。

だが、山本は豫めこのことあるを知つて、左近允の短刀を隱してゐたので、それも出來ず、左近允はさん〳〵山本を罵倒したまゝ別れた。

思へばそれが二人の最後の日であつた。明治十年の西南役が起ると、左近允は薩軍に加つて奮戰遂に戰死したのであつた。

獨逸へ留學

海軍兵學寮は、勝海舟が精魂を打込んだ海軍操練所をそのまゝ受けついだもので、學頭は海軍少將中牟田倉之助であつた。

中牟田少將は、さきに勝海舟らと共に長崎海軍傳習所に學んだ第一期の卒業者で、海舟に深く

師事してゐた。

「中牟田君、山本といふ男は氣性は少し荒つぽいが、あれでなか〳〵緻密な頭腦を持つてゐるからよく面倒を見てくれたまへ。」

海舟は、中牟田に會つたさい、こんな話をしたことがあつた。海舟の邸に山本が門下生として住込んでゐたのは僅か一ケ月餘りであつたが、海舟は山本の爲人に見るところがあつたらしい。

兵學寮は、和洋折衷の二階建で、その頃としては珍らしい硝子窓に鎧戸がかゝり、玄關は半月形のヴエランダーであつた。生徒たちの寄宿舍は增山河內守の上屋敷と、松平越中守の下屋敷が使用されてゐた。

生徒たちの服裝は、冬服は黑羅紗のダブル釦、夏服は白麻の開き襟に黑の蝶ネクタイといふスマートなものであつた。

身の丈五尺七寸の堂々たる體格を持つ山本の學生姿はなか〳〵見事なものであつた。大藩の生徒といふことと、頭腦が優れてゐたことと、それから押の强い點で、いつも生徒の中で頭角を示してゐた。上村彥之丞（後の海軍大將）は同級生であつたが、同藩の誼で非常に仲がよかつた。

入學してから三年目の明治五年八月には成績優秀で中牟田學頭から表彰されたが、その後は、病氣と僞つて鹿兒島へ歸つたことや、教官や事務員などに楯ついたりしたことが祟つたのか、一度も表彰されたことはなかつた。

けれども成績は依然として優秀で、明治七年十一月、足かけ五年の螢雪の功成つて目出たく卒業し、たゞちに少尉補となつた。こゝに彼が宿望は達せられたのであつた。時に彼れ二十三歲。

小尉補となつた彼は、明治八年練習艦筑波に乘組んで、臺灣とアメリカ西岸への遠洋航海に出で、いよいよ本格的な海軍生活に這入つた。

明治九年歸朝してみると、この年思ひ出多い海軍兵學寮は海軍兵學校と改稱して江田島に移轉し、近代的大規模のもとに海軍士官の養成に當ることになつてゐた。山本少尉補は、暫くではあつたが、この新しい兵學校に入學を命ぜられ、その學術と體驗の上に一段の磨きをかけた。

明治十年、海軍學研究のためドイツに派遣された。一行は山本のほかに片岡七郎（後の海軍大將で、日露海戰の司令官）ら七名の少尉候補生であつた。

彼等は、同年九月からフオン・モンツ伯を艦長とする練習艦ヴイネタ號に乘組んで猛訓練をう

け、山本は特に伯から可愛がられた。

西南の役が勃發したことや、大西郷が城山で悲慘な最期を遂げたことを知つたのは、彼等がドイツに着いてからのことであつた。東郷平八郎が、イギリス留學中に大西郷の最期を知つて感慨無量であつたことと同じやうに、山本もまた感慨切なるものがあつた。

明治十一年、ドイツは南米のニカラグア國と紛爭を起し、ドイツ海軍はこれを攻擊することになつた。その時、山本ら七名の日本人留學生は、軍艦ライプチツヒに乘組んで出征したが、パナマに到着すると、艦長は山本らが砲術に長じてゐるのを見て、彼等を上陸させ、艦砲を揚陸してこれで敵を砲擊させることにした。

山本らはこれこそ日本男兒の腕前を發揮する好個の機會であり、またよい經驗だと思つて、勇躍これに參加することを承諾した。

しかし、これにはこれら留學生を依託してゐる日本政府の許可がいるので、艦長はドイツ政府を通じて、電報で日本政府に交渉してきた。

わが海軍省では、何等の考慮を要することもなく、

「山本少尉らを貴國へ留學させてゐるのは、將來わが海軍の要部に當てるためである。他國の戰爭に參加させることは承諾されない。已むを得なければ退艦させてもよろしい。」

といふ回答を與へた。

軍艦ライプチツヒは、戰爭を目的として南米に派遣されたのであつたから、日本留學生を戰爭の渦中に卷き入れることは、日本政府の回答に反するものとして、パナマで其全部を退艦せしめた。

「あの時、上陸して一戰やつたら、敵味方を大いに驚かせてやつたがなア。殘念なことをした。」

山本は、後年わが、海軍の要部に立つやうになつてからも、屢々これを繰返してゐた。

序でにいふが、山本大將がその一生を通じて實戰に當つたのは、鳥羽伏見の戰と、庄内藩征伐と、それから五稜閣攻略の時の陸戰だけで、長い間の海軍生活に一度も海での實戰に當つたことがなかつた。いつも帷幕の樞機に參畫してゐた。もし、ニカラグアの戰爭に參加してゐたならば外國の戰爭とはいへ、實戰參加の一つに數へらるゝが、かれらが乘艦してゐた時までは、ライプチツヒは一發も砲門を開かなかつた。

東郷と梯登り競爭

明治十一年の五月は、帝國海軍にとつて記念すべき目出たい月であつた。

足かけ八年間、イギリスで海軍學を修めてきた東郷平八郎が軍艦比叡で、足かけ二年間ドイツで海軍學を修めた山本權兵衞や片岡七郎らが、アメリカの商船で、相ついで横濱に歸つてきた。

そして、二人とも申合せたやうに軍艦扶桑の乘組員となつた。

扶桑は、三、七七七噸の二等戰艦で、當時のわが海軍としては最も優秀な戰艦であつた。艦長は後にわが海軍の元帥となつた伊東亨祐で、勇將の下に弱卒なく、その部下は揃ひも揃つた猛者連であつた。

東郷は、歸朝後間もなく中尉になつたが、山本は少尉であつた。しかし山本は艦内中の惡戲者として、茶目として縱にも横にも人氣があつた。東郷は、意識的にする譯ではないが、長い間の英國生活の慣習によつて、何かしら英國流の紳士的な態度を持し、その號令も、歸朝早々のことで、日本式の號令がよく分らなかつたので、我流の號令を平氣でやつた。それが他の同僚たちに

面白くなかつたと見えて、何か一つあの高慢で强情な東郷を困らせてやらうとより〳〵相談されてゐた。

「よしッ、俺が一つ東郷中尉の鼻柱をへし折つてやらう。」

と買つて出たのは、評判の茶目少尉山本であつた。

この日、士官たちは晝食後の小休時で甲板の逍遙をやつてゐた。山本少尉は、東郷中尉の姿を目ざとく見出して、

「東郷中尉、貴公はイギリスで、僕はドイツで海軍を修業してきたが、イギリス流とドイツ流とどッちがいゝか、一つ實地で試してみようぢやないか。」

と、持ちかけた。

「それは面白い。どんな方法で試めすか。」

「みんなが見てゐる前で勝敗を決するには、梯索の昇降競爭がいゝと思ふがどうだ。」

「それは妙案だ。」

東郷中尉は、快く山本少尉の申入れに應じた。

「ヨーイ、始めッ！」

まるで「打方始め」のやうな號令を他の士官が、かけると同時に、ドイツ仕込みと、イギリス仕込みの青年士官は、猿のやうにあの急角度の高いリッキングをする〳〵と駈け昇つた。

士官や水兵たちは、ニコ〳〵しながら、

「山本少尉！」

「東郷中尉！」

と聲援してゐる。

ところが、東郷中尉は昇る中途で、ズボンを破つて、行動の敏活を失つた。その間に、山本少尉は大兵胞滿の體を身輕にこなして、東郷中尉が漸く中途まで降りてきた時には、已に悠々と降りつくして、どんなもんだといふやうに得意滿面の顏をしてゐた。

東郷中尉が降りてくると、山本少尉はます〳〵得意になつて、

「イギリス仕込みが、ドイツ仕込みに負けたわい。」

と、鮮かに東郷の鼻柱をへし折つたつもりだ。

「いや、あれは俺の技が負けたのぢやない。ズボンの破れが負けたのだ。」

と、平氣な顏で言つた。

甲板には、二人のためにどッと笑聲が起つて、これまでの不愉快な空氣などは、一瞬にして消し飛んでしまつた。

その後間もなく、山本は中尉に昇進して軍艦乾行、龍穰、淺間と轉乘して海軍兵學校勤務を仰せつけられ、大尉に昇進して淺間の副長となつた。明治十八年四月には、少佐となり、軍艦浪速の回航員として英國に赴き、明治二十年六月に歸朝したが、その翌年九月にはまた樺山海軍次官に隨伴して歐米を視察し、滿一ケ年を要して翌年十月に歸朝した。

かうして、彼の海軍生活は極めて順調にすゝみ、明治二十四年には第一次松方內閣の樺山海軍大臣の下に官房主事（大佐）となつた。時に年齒四十。

海軍豫算成立に奮鬪

この頃から、日清の風雲いよ〳〵急を告げて、どうしても一戰を免れ得ない情勢にあつた。

そこで、わが陸海軍はこれに備へるため、陸軍は砲臺築造費として三百萬圓、海軍は軍艦建造費として二百七十五萬圓の豫算を帝國議會に提出した。ところが議會は民力休養、國費節減を理由として總豫算額八千三百餘萬圓を七千五百萬圓に削減し、軍艦建造費や國防上最も重要な製鋼所設立費のごときはその全部を否決した。

樺山海相はもちろん、全海軍を擧げて悲憤の涙にくれたが、特に山本權兵衞は痛憤措くあたはず、

「よろしく議會を解散して、眞に國家國民を思ふ議員を擧ぐべし。」

と主張してやまなかつた。

果然、議會は解散されたが、再び選出された代議士も、國防强化の重大性を認識しない者が多く、民力休養などといふ選擧區に受けるやうな態度をとつた方が、議員として、安全であつたので、依然として軍艦建造費に反對するやうな氣配があつた。

畏くも　明治天皇にはこの國家の重大危機を前にして、國防を忽せにすることをいたく御軫念あそばされ、今後六年の間、內廷費をお省きになつて、毎年三十萬圓づゝを製艦費補足のために下附する旨を仰せ出された。

議員はいふまでもなく、萬民恐懼感激して、こゝに始めて建艦は豫定のごとく進捗した。

山本大佐は、この頃から痛切に議員の素質の向上と改善について感じたのであつた。

後年、彼が第一次山本內閣を組織するや、その所信を斷行すべく着々準備をすゝめてゐたが、反つて議會の反擊を受けて、シーメンス事件のごとき忌はしい問題を以て內薄され、遂にその責を引いて挂冠させるを得なかつた。

日清戰爭中には、西鄕從道海相のもとに、當初は海軍省主事として、後には大本營海軍大臣副官、さらに少將に昇進して軍務局長として重要な任務に當つた。

西鄕海相は、陸軍中將から轉じて海軍畑に這つた人であるから、海軍についてはズブの素人であつた。だから殆ど重要な仕事は山本大佐に任せてゐた。それで省內では「權兵衞大臣」といはれ、山本大佐の帆かけ船の形をした印判が捺されると、もう大臣のサインがあつたと同樣なものだとまでいはれた。

西鄕海相が帝國議會へ出て、議員の質問をうけて分らぬことがあると、

「ちよつと待つてくれたまへ。山本に訊くから……。」
と言つた調子であつた。
西郷海相は、さすがに大西郷の弟だけに、度量も大きく、大局を摑むことも確かであつたが、些事についてこだはらぬ性格を持ち、一旦信じた人物に對しては、どんな重要な事でも任かせきりであつた。從つて部下の統率や外部との接衝もきはめてなだらかであつた。こんなところを高く評價されて、國運を賭した日清戰爭當時の海軍大臣の要職に擧げられ、かつ手際よくこれを捌いたのであつた。
東郷元帥の項で述べたやうに、日清戰爭の緒戰における英船高陞號擊沈事件は、むしろ我が朝野に一大衝擊を與へたが、時の總理大臣伊藤博文は、驚愕のあまり、西郷海相にその説明を求めた。
「君が行つて説明してくれ。」
西郷海相は、事面倒と見て、山本大佐を首相官邸に遣はした。
伊藤首相は、かねて海軍に山本權兵衞ありといふことを知つてゐたが、その落ちつき拂つたふ

てぶてしい態度を見ると、一層激昂して、
「一體、海軍はこの後始末をどうするつもりか。」
と、拳をかためて、グワンと卓上を敲いた。そのはづみに、卓上のウヰスキーグラスがぽかんと浮きあがつて、床の上に落ち、粉微塵に壞はれた。
山本大佐は、ます〳〵落ちつき拂つて、
「海軍省には、まだ何にも公報が來てゐませんが……」
と、呆けたやうな顔をしてみせた。
「こんな重大事件について、まだ公報が來てゐないとは何たる怠慢だ。」
明治の元勳、伊藤博文も、この事件にはよほど心痛してゐたらしい。
むろん、海軍省にはとうに公報が到着してゐるが、東郷浪速艦長のやつた高陞號擊沈が惡いものだと先入主感に支配されてゐる人に對して、いくら説明しても無駄だと考へたから、山本大佐は敢てそれ以上のことを言ひたくなかつた。
後で、西郷海相が伊藤首相に會つたとき、

「東郷のやつたことには問違ひはごわせん。」

と言つたが、それでも伊藤首相は、どうしても安心することが出來なかつたらしい。

それだけ、英國の激昂した輿論がほぐれて、東郷艦長のやつたことは正しいといふことになつた時には、伊藤首相は誰よりも嬉しかつたに相違ない。

對露戰爭の戰備に挺身

日清戰爭の大勝利に國民が有頂天になつてゐる時、陸海軍では早くも次ぎの戰爭に對する準備に餘念がなかつた。

それは、ロシアが清國の內兒を見透して、さかんに清國の領土に軍隊を送り、特に日本と密接の關係にある滿洲を侵略しようとして、旅順を要塞化し、北鮮一帶にまでその爪牙を伸ばし、海には强力なロシア東洋艦隊を旅順と浦鹽に配し、日本の存立を脅かしてきたからである。

海軍省は、軍艦その他の軍備を整へるため、明治三十一年の帝國議會に二億圓の豫算を提出することになつて、閣議に諮つた。

すると、時の大藏大臣井上馨は、びつくりしてその閣議の席上で西郷海相に向ひ、

「西郷さん、あんたも少し眞面目に考へてもらはなければ困る。いつたい我が國の歳入は幾らだと思ひます……八千萬圓ですぞ。」

と、ぷり〳〵憤つた。

西郷海相も、輕く受けながして、

「一年にそれを費ふのぢやなかです。しかし詳しいことは、山本軍務局長から說明させます。」

と、言つた。

その翌朝、山本軍務局長は西郷海相の命をうけて、大きな鞄を抱えこみながら井上藏相の官邸を訪問した。

井上馨は長州の人で、これまで殆ど山本權兵衞と會つたことがないばかりでなく、「山本といふ男は奸物だ」といふ評判を聞いてゐたので、大いに警戒しながら會つてみた。

井上馨は明治維新の元勳であり、また非常にむづかし屋として知られて、時の總理大臣は彼と爾汝の關係にある同郷の伊藤博文であつたから、井上の羽振は、飛ぶ鳥も落すやうなものであつ

た。もし、この際井上藏相が海軍擴張案の豫算に反對をしたならばそれ切のものであつた。

曾ては、衆議院の反對によつて海軍擴張案が阻止されてしまつたが、こんどは大藏大臣の反對で阻止されさうな形勢にあつたので、山本軍務局長はこれを打開するため、必死の覺悟で打つ突かつた。

山本軍務局長は、先づ日清戰爭後の三國干涉の眞意から、現在ロシアが日本と一戰する覺悟で東洋で軍備强化に餘念のないことを、その正確豐富な資料に基いて述べ、恐らく十年以內に戰端を開くにいたるだらうといふ觀測を述べ

「日本には、悲しいことには軍艦を建造する十分な設備がありません。だから外國に註文するのですが、一隻の戰艦を建造するには三、四年もかゝります。いざといふ時に註文しても間に合ひません。ロシアも日露開戰に備へて、外國に軍艦の建造を依賴するでせうが、外國にだつて、一ぺんに兩國の軍艦を何隻も建造する能力はありませんから、いまロシアが積極的に軍艦建造に着手しないうちに、世界の優秀な造船所に發註しておいて、後からのロシアの註文を受けつけられないやうにしておくのが肝要です。これも一つの戰爭であつて、已に日露の兩國は戰端を開いてゐるといつていゝでせう。むろん、戰爭には精神力が一番大切ですが、近代の戰爭では、たゞ精神力だけでは勝てません。その世界に冠絕する精神力と相俟つて、優秀な武器を備へてゐなければ最後の勝利を得ることはできません。」

山本少將は、說き來たり、說き去つてつきるところを知らず、とう〳〵晝飯時になつた。

「わしはお腹がすいてきた。あんたも一しよに晝飯を食べませんか。」

「まだ、話がすんでゐませんから、それではお晝飯をよばれてから又申上げませう。」

山本少將は、井上藏相がやゝ自分の說に動きかけてきたのを看て取り、この機を逸せず、一氣に說き伏せようと考へた。

晝食は洋食であつた。山本少將は食事をしながらもなほ話を緩めなかつた。

「山本さん、食事の時だけぐらゐは、何か肩の凝らない話はないか。」

「けふは、是が非でもあなたにウンと言つてもらひたいためにお伺ひしましたので……。」

「まだ〳〵、そこまでは行かんぞ、アハッハッハ。」

食堂から再び應接室にかへると　山本少將は直ぐにまた海軍の話を始めた。

この間にいろ〳〵の訪問客があつたが、井上藏相は總てこれを斷つて、熱心に山本少將の話を聞いた。そしてその話を聞いてゐるうちに、烈々たる愛國の至誠と、その話の中に何等の私心のないことを知り、

（世間では、この男を奸物だといふが、飛んでもない誤解だ。こんな純眞無垢な愛國者は滅多にあるもんぢやない。西郷海相は全くいゝ部下を持つたもんだ。）

と、衷心から山本を尊敬するやうになつた。

遂に話は午後五時に及んだ。

「山本さん、あんたの話でよく分つた。二億圓の豫算は、わしが誓つて引き受けた。」

井上藏相は、敢然として言つた。

山本少將は嚴肅な態度で一禮をした。

全く劇的な一瞬であつた。

かくて、日露海戰に對する軍備は捗々しく進み、英・佛・獨にさかんに軍艦の建造を註文し、その備砲は當時世界第一の優秀品を製造してゐた英國のアームストロング會社に註文した。日露海戰にあたつて、わが海軍の艦載砲が、露國艦隊のそれに比べてはるかに優れてゐたのはこのためであつた。また、明治三十年にはこれまで參謀本部の一局で、陸軍大將の令下にあつた軍令部を海軍に移して、次の海戰に備へた。こんどは、陸主海從の國防時代であつた當時としては、容易のことではなかつたのを、山本軍務局長の努力によつて實現したのであつた。

明治三十一年五月、山本少將は中將に昇進し、同年十一月には軍務局長から、次官を飛び越えて、一躍して第二次山縣（有朋）の內閣の海軍大臣となつた。全く異數の拔擢であつたが、しかし彼は已に西郷海相のもとに、立派に海軍大臣の仕事を仕遂げてきたのであるから、別に異とするに足らない。

東郷提督起用の經緯

舞鶴鎭守府司令長官東郷平八郎中將は、山本海相の招電に接し、直ちに上京して海相の私邸を訪ねた。

「遠路のところ、御上京を願つて御苦勞でした。」

山本海相は、慇懃に述べて東鄉中將を犒つた。

「何か急用でも……。」

東鄉中將も、さすがに氣になつた。

「實は、あなたに聯合艦隊司令長官になつていたゞきたいので……。」

東鄉中將は、あまりの意外な話に驚きながら、

「聯合艦隊司令長官には、歴とした日高中將（壯之亟）がゐるではありませんか、それに佐世保鎭守府司令長官の柴山中將（矢八）もゐることだし……。」

と、その二人の華やかな立場と、自分の地味な立場を比べて、當を失した人事だと思つた。

日高中將も柴山中將も、やはり東鄉、山本兩中將と同じく鹿兒島の出身で、年齡からいへば東鄉が一ばん年嵩の五十七で、次が二つ下の日高、その次が四つ下の柴山、その次が六つ下の山本であつたが、日高も柴山も、實戰派の猛將として、帝國海軍の發達に大きな功績を擧げ、勇名嘖々たるものがあつた。殊に柴山は、明治八年には已に大尉となり、日清戰爭勃發のさいには少將として佐世保鎭守司令長官の要職にあつた。その頃、東鄉も山本もまだ大佐であつたから、二

人の大先輩である。

かういふ關係で、衆目の見るところは、日露戰爭が始ることになれば、當然この日高か柴山の何れかゞ聯合艦隊司令長官となるものだとされてゐた。

そこへ、突如として世間からも、部內からも殆ど問題にされてゐなかつた東鄉中將に聯合艦隊司令長官就任の相談があつたのだから、第一に東鄉中將自身が意外に思つたのは當然である。

「この人事は、わしが研究に研究した末に決定したことですから、御苦勞ですが是非お受けしてもらひたい。」

「しかし、柴山さんや日高さんから横槍が這入りませんか。人の和を缺いては戰爭に勝つことはむづかしいから……。」

「そんなことは決して氣にかける必要はありません。その點はわしに任かせてもらひたい。國家の大事に當つて、個人の感情などに拘泥しては居られませんからなア。」

かういふ譯で、山本海相は遂に大東鄉の說得に成功したのであつた。

山本海相が、人の意表に出て東鄉中將を起用した理由は、その沈勇と、叡智と部下の統率に長

じてゐた點を高く買つてゐたからであつた。

いつたい山本といふ人は、人について最も熱心に研究をしそゐた人で、例へば何かの用件で本省に訪ねてきた青年將校があれば、

「あの男は誰だ」

といふことから始めて、その性質、閲歴、交友關係なども詳しく訊き、それを悉く暗記してゐて、他日の人事異動の場合などに活用する。だから、何かの機會にその本人と話すやうなことがあると、

「君の友人に誰々がゐる筈だが、あれはこの頃どうしてゐるか。」

といふやうな調子であるから、當の本人はすつかり參つてしまふ。

よく世間で「薩の海軍、長の陸軍」といはれたが、山本海相は海軍省で人事に關係ある事務を掌つてゐた時代から、決してその鄕黨關係などに囚はるゝことなく、適材適所に拔擢することに努めた。こんにちの帝國海軍には事實も世評もないが、現在全國的に網羅するわが海軍の首腦者は、山本海相のかうした人事の溫床から成長してきた人々が多いのであらう。

「薩の海軍」といはれたのは、要するに薩州が維新前後から最も海軍の建設に力を入れ、從つて有力な海軍士官を出した結果であつて、もし他の藩がその時代から海軍建設に邁進し、そしてその子弟の育成に大いに力を盡したならば、あるひは「△の海軍」とか「○の海軍」といふものが出來てゐたであらう。著者は、薩州には何の關係も持たぬが、ともかく帝國海軍をして今日あらしめたことについては、薩州の功績は決して逸することのできないものと信ずる。

至誠、猛將を屈せしむ

山本海相は、東鄕中將に會つた翌日、聯合艦隊司令長官日高中將をその官邸に招いた。

日高中將は、いよ〳〵日露の關係が緊迫した實情に鑑みて、開戰の準備に關する打合せだと思ひ、己にその眉宇の間には燃ゆるがごとき鬪志が漲り、猛將の名にふさはしい逞しい相貌をしてゐた。

これを見た瞬間、さすがの豪膽の山本海相も、ちよつとたぢろいたが、思ひ切つて、

「けふ、あなたに來てもらつたのは、聯合艦隊司令長官をやめて舞鶴鎭守府司令長官になつてい

たゞきたいためです。」

と、ズバリと突き込んだ。

一瞬、日高中將の顏は、滿面朱を濾いだやうに熱し、つゞいて見る〳〵蒼白となつて、

「山本、それは本氣で言つてゐるのか。」

と、呶鳴つた。

山本海相は、あくまで冷靜に

「君の氣持はよくわかるが、この場合忍んでもらひたいのだ。」

「貴公は、俺に死ねといふのか……よろしい、それでは先づこれで俺を刺せッ。」

と、素早く短劍を引拔いて山本海相の前の卓上に突出し、

「而して後、更迭をやれ。」

と迫つた。

「ハハハッ、君はいつまでも元氣がいゝの。しかし、こんどの更迭は、君にその元氣がありすぎるから行ふのだ。君の性格から見て、開戰の際にも恐らく大本營の作戰に從はないで、君獨自の

行動をとるものと思ふのだ。こんどの戰爭は、さうした昔の一騎打ちみたいなことをして勝利を得ることはできないのだ。もし、出先の司令長官が、大本營で決定した示達に從はぬことになれば、作戰は根本から壞はれてしまうのだ。君が智勇兼備の名提督であることは我輩もよく承知してゐる。けれども、君には唯一つこの缺點がある。それは我が强すぎることだ。言ひ換へれば、總てを自分の所信どほりに斷行しようといふことだ。それでは陸海軍協同の大作戰は圓滑に行はれない。卒直にいへば、君はこんどの大戰爭の艦隊の司令長官としては危つ氣があるのだ。先輩に對して、また多年の友情に對して、こんな處置をとるのは情において忍びない。しかし、この國家の興亡を賭くる大戰爭を前にしては、お互の私情などはかなぐり棄てゝ、たゞ一意君國に報いる忠誠の念によつて行動すべきであると信ずる。日高、我輩の立場も察して、この際男らしくこの更迭に應じてくれ。」

山本海相は、さらに切々國を懷ふの至情と、その更迭の餘儀ないことを諄々として說いた。

日高中將は、あの剛愎な山本の眼に、白いものが光つてゐるのを見ると、全身に沸騰してゐた血に、水をあびせられたやうに急に冷靜になつて、

「して、俺の後任は誰だ。」
と訊いた。
「舞鶴の東郷だ。」
「ウン、東郷か。」
日高中將の顏が、急に晴れやかになつて、
「さすがに君の眼は高い。東郷ならば申分のない司令長官だ。」
と、靜かに短劍を收めた。
日高中將は、その後間もなく山本海相に書簡を贈つて、當時の失禮を謝すとともに、自分の缺點について卒直に述べたのは、これまでの生涯を通じて貴下だけであつた。大いに感謝する、自分は今後この缺點を匡正することに努めるであらう——といふ意味を述べてあつた。
英雄の心事は高朗である。
いちど、その不意打に激昂した日高提督も、山本海相の愛國の至誠に感じて以來、さらりとその不滿を一擲して、一段と友情を加へていつたのである。

伊藤總理大臣は、日露海戰中「山本さんの豪いところが三つある」といつて、一は、默々十年間帝國海軍の强化を計つて、今日露國の海軍に比べて何等の遜色がないまでに育てあげて來たこと、二は、東郷中將を聯合艦隊司令長官に起用したこと、三は、まだ言へないと、その三點を擧げた。
正しく、東郷中將の起用は、山本海相の成功であつた。これはいふまでもなく、山本海相が國家のためには一切の私情を超越して事にあたるところから來てゐる。
さらにその一例を擧げてみると、ロンドン條約を締結した責任者である海軍大臣財部彪大將が歸朝するや、海軍部內には囂々たる非難の聲が起つた。
財部海相は、衆知の如く山本大將の女婿であり、また山本大將は海軍の大御所として部內に隱然たる勢力を持つてゐたので、ひとたび山本大將が起てば、この非難を緩和することができたかもしれぬが、山本大將は事いやしくも國防に關する重大問題であつたので、敢て財部海相を庇護するやうな行動を絕對にとらなかつた。
大義親を滅する——といふのは、山本大將の信念であつた。

極力戰意を秘す

明治三十六年の秋頃になると、日露の關係は一觸卽發の危機に達してきた。

國民の敵愾心は、灼熱のやうに燃えあがつてきた。

（日清戰爭の直後、三國干涉によつて遼東半島を清國に還附させた張本人はロシアだ。それにもあきたらず、滿洲朝鮮を占領して、日本の獨立を脅かしてゐる。もう容赦はできぬ。速かに開戰してロシヤを討て！）

といふ聲は、全國の津々浦々に、澎湃として漲溢した。

だが、軍部は自重して起たなかつた。

（何のための臥薪嘗膽の十年間だ。この一戰に備へるためではなかつたか）

と熱叫する聲が起るかと思ふと、いつの時代にもあり勝なことで、

（陸軍は、戰ふ意志があるが、海軍は戰ふ氣がないさうだ。それは山本海相が卑怯だからだ。）

と、軍の態度を憶測するはしたない暴論まで飛びだし、新聞は新聞で、さかんに主戰論を唱へて、國民の愛國心と敵愾心を煽るとともに、海軍が煮えきらぬといつて攻擊した。その頃の新聞の勢力といふものは大したもので、各新聞が筆を揃へて論ずると、內閣を倒しも起しもしたものである。

山本海相のもとには、さかんに投書が舞ひこんで、卑怯者といひ、速かに辭職せよといひ、生血の滴るやうな激越な文字を列ねてあつた。

山本海相は、これにはひどく惱まされた。しかし、それは一面嬉しい惱みであつた。といふのは、これほど國民の戰意と愛國心が昂揚すれば、戰爭は必ず勝つといふ自信が出來たからであつた。

けれども、山本海相は出來るだけ開戰の期を引きのばして、その間に出來るだけの戰備を整へておくことにした。

「小村さん、せつぱ詰つたところで、後どのぐらゐ引きのばされますか。」

明治三十六年の秋も已に半をすぎたある日、山本海相はロシアとの外交折衝に血みどろの努力をしてゐる小村外相（壽太郎）に訊いた。

「せいぐ〜後四ケ月でせう。それから先は、もう絶對に引きのばす餘地はありません。」

さすが、一世の大外相であつた小村だけに、ちやんとその見透しがついてゐた。

「ぜひ、四ケ月だけ引ぱつてゐてください。」

山本海相は一生懸命であつた。

そして、その四ケ月の間に、平常ならば二年も三年もかゝるやうな軍備をどん〜進めていつた。時の桂首相（太郎）は、外交は小村、海軍は山本がゐるから大丈夫だと、外交と海軍に關することとは一切二人に任かせきりであつた。

その四ケ月も已に過ぎ去らうとした明治三十七年二月九日未明、電擊雷搏のごとく旅順のロシア東洋艦隊を攻擊して、敵艦に大損害を與へ、同じ日に仁川では敵艦三隻を屠つた。

この日わが國民の感激は、昭和十六年十二月八日、ハワイ攻擊、上海の米英海軍攻擊その他の大快報に接したときと同樣であつた。

「さすがは帝國海軍だ。」

國民は、はじめて帝國海軍の遠謀深慮を知つて、いまさらの如く是まで山本海相その他海軍首腦部に對する非難を恥ぢるとともに、帝國海軍に對する大なる信頼をかけた。

思へば、山本海相が、その少將時代の明治二十八年に海軍省兵務局長となつて以來、海軍大臣を通じての十年間、孜々として物心兩面にわたり、帝國海軍の强化擴充に努力してきた成果が、この時いよ〜その實力を發揮することになつたのだ。そしてあの世界海戰史に未だ曾てない大勝を博したのである。

山本大將の帝國海軍における功績は、潛水艦の强化、航空部隊の擴充等々ほとんど枚擧に遑ないが、この日露開戰直前までの用意周到な準備時代と、戰ひの第一彈を發射するまで、絶對に敵意を示さず敵に油斷させたことは、特筆大書すべきものであらう。

獨帝に海軍魂を說く

山本大將は、日露戰爭が終つた翌年——明治三十九年の一月、足かけ九年にわたる海軍大臣を辭して參議官に列した。五十五歳。

翌年一月、伏見宮貞愛親王殿下が、さきに　明治大帝に英國皇帝からガーター勳章御贈進の事

があり、その御禮のために御渡英あらせらるゝに當り、大將はこの副使として供奉した。隨員には後の軍令部長加藤寛治中佐などの俊髦が多數あつた。

その大任を果した後、山本大將はドイツを訪問した。その一つの用向は、その青年時代にドイツに留學した折、特に面例を見てもらつた恩使モンツ伯の墓參をなすためであつた。

當主モンツ伯（豫備海軍中將）は、東洋の君子國日本の大提督が、わが父の墓參をしたことを衷心からよろこび、マツトヘイの墓地に案内した。

山本大將は、墓前に大花環を捧げて額くことしばし、三十年前の故人と自分ら留學生の姿を呼び起して、綿々としてつきぬ追懷の情に耽けるのであつた。

墓參が終ると、當主モンツ伯は、一振の劍を恭しく山本大將に贈つて、

「この劍は、父が生存中に永く佩用してゐたものです。名譽ある閣下のお手許に御保存くださらば父の靈はこの上ない光榮として悅ぶでせう。」

と言つて、墓前で嚴かな贈呈式を行つた。

たしかに見覺えのある劍である。大將は犇と押しいただいて、雲のごとく湧きあがる新たなる感慨が胸に衝きあげてきた。

この劍は、大將の遺言により、その逝去後、江田島の海軍兵學校參考館に寄贈せられ、依然としてその名譽を保つてゐる。

それから山本大將は、訪獨の目的の一つである獨帝カイゼルに謁見した。

その頃、カイゼルの英名は世界を風靡して、外國使臣に會つても輕くあしらふといふ有樣であつたが、山本大將は日本海軍の總指揮者である海軍大臣として强敵ロシア艦隊を擊滅するに至らしめた赫々たる武勳者であるから、きはめて鄭重に遇し、その話も自ら肚を割つた眞實のものであつた。

カイゼルは、ドイツも大いに海軍を擴張したいが、議會がこれを阻止するので、どうも思ふやうに行かぬと、しんみりと述べて、一種の孤獨感を愬へ、さらに、將來日本とドイツとが提携して世界の平和確立に盡すべき運命にあると述べ、話を轉じて、

「日本の軍艦の模型を見ると、救命用のボートの數が甚だ少いが、あれは何ういふ譯ですか。」

と訊いた。

山本大將は威儀を正して、

「そのことについてお答へいたします。わが日本海軍將兵は、戰爭に臨めばよろこんで　天皇陛下のために一命を捧げる覺悟を持つてをります。生死のごときは眼中になく、常にこれを超越してをります。從つて軍艦に救命艇の必要もないのであります。これまでの戰歷に徵して、あの少數の救命艇は、多くの場合敵を救ふために使用されてをります。」

と、帝國海軍の至高至純なる一死報國の傳統的精神を、縷々として、しかも堂々と述べたのであつた。

皇帝は大きく頷いて、初めて日本海軍の強い理由を悟られたやうであつた。

大東亞戰爭の蔭に

山本大將は、大正二年二月二十日、內閣總理大臣の大命を拜し、たゞちに內閣を組織して、着々、その大經綸の實現に努力しつゝあつたが、圖らずもシーメンス事件の暗礁に乘りあげて翌年四月總辭職をなし、五月には豫備役、同六年十月に後備役となつたが、海軍部內はもちろん、國內においても隱然たる勢威を有してゐた。そして雌伏十年後の大正十二年九月二日、再び組閣の大命を拜し、總理大臣兼外務大臣となり、閣員には天下一流の人材を集め、內外驚異の的となつてゐたが、經綸いまだ緒につかざるに先だち、虎の門事件の責を負うて、辭職するに至つた。

海軍軍人としては、洵に順調なコースを辿つてきた人であるが、政界では全く氣の毒な荊の道であつた。

昭和三年一月、七十七歲のとき大勳位菊花大授章を賜はり、同六年八十歲に達して宮中杖を差許され、同八年十二月には菊花章頸飾を賜はり、臣下としてこの上もなき榮譽に浴した。

この年三月、賢婦人の譽高かつた夫人に先だゝれてから、とかく健康が勝れなかつたが、同年十二月九日八十二歲の高齡をもつて大往生を遂げた。

後半生における政治生活の蹉跌の印象によつて、やゝもすればその海軍における偉大なる勳功が、世人の念頭に稀薄になつてゐるかのごとき憾があるが、大將の海軍における功績——いな日本帝國における一大功績は、最も高く評價すべきであり、こんにち大東亞戰爭における帝國海軍の赫々たる武勳の蔭には、大將がその在官中、全身全靈を打込んで、帝國海軍の强化の基礎を築

いた功績のあることを忘れてはならぬ。

身を以て描いたわが海軍史

神將東郷の輝く一生

ハワイの米國旗を引降す

ハワイのホノルル波止場に、帝國軍艦浪速の陸戰隊が、武裝凛々しく上陸した。

陸戰隊は、艦長東郷平八郎大佐を先頭として、隊伍堂々と目抜の市街へ行進した。

沿道には、在留日本人が日の丸の旗を打ちふりながら、咽も嗄れよとばかり萬歳を叫び、相擁して嬉し泣きに泣いてゐる者さへある。

陸戰隊は、やがてキング街のハワイ政廳前の廣場にきた。

政廳の屋上には、米國國旗星條旗が、翩翻としてひるがへつてゐる。かうした場合には、外國

の軍隊はその國旗に對して敬意を表することになつてゐる。

けれども、わが陸戰隊は、その星條旗に敬意を表するどころか、冷やかな一瞥を投げたゞけで政廳の前を過ぎ去らうとした。

すると、政廳の守備にあたつてゐたアメリカの軍隊が、陸戰隊の先頭に立塞がつて、

「なぜ、國旗に對して敬禮をしないか。」

と、咎めた。

明治二十六年二月下旬のことである。

東郷艦長は流暢な英語で、

「それは笑止な話だ。ハワイは立派な獨立國である。その獨立國の政廳に、アメリカの國旗が掲揚されてゐるのが間違ひだ。そんな得體のしれぬ國旗に對しては、日本帝國軍人は斷じて敬意を表しない。」

と、米國兵の抗議を一蹴した。

「カメハメハ王家は、すでに滅亡して假共和政府が成立してゐるのだ。われ〳〵アメリカ軍隊はその假政府を保護するためにアメリカ本國から派遣されたものであつて、そのために米國國旗を掲揚してゐるのだ。」

米國軍隊の指揮官が、いきり立つて辯明した。

「それはいよ〳〵以て笑止しい。假政府はハワイ國の假政府であつて、アメリカの假政府ではない。カメハメハ王家は亡びても、ハワイ國は依然たる獨立國だ。」

東郷艦長は、いきり立つた相手を冷笑しながら言つた。

米國將校は、東郷艦長の理路整然たる抗辯に對してたぢ〳〵となり、

「しかし、こゝは一國の政廳であることには間違ひないだらう。」

「その通り。」

「では、ハワイ國の國旗が掲揚されたら、敬禮をするか。」

「もちろん」

引込のつかなくなつた米國將校は、何とかしてこの場を繕ひたかつたと見え、部下に命じてす〳〵と星條旗を引きおろし、それに代つてハワイ國旗を掲げた。

東郷艦長は、ニッコリとしてハワイ國旗を仰ぎ見ながら、

「喇叭を吹け。」

と命じた。

わが陸戰隊は、その國旗に向つて敬意を表しながら、嘹喨たる喇叭を吹奏しつゝ。威風堂々として行進した。

これを見送つた米國軍隊は、地團駄ふんで口惜しがつたが、堂々たる帝國海軍の威風に壓倒されてどうすることも出來なかつた。

米艦隊の劣勢を看破る

八十三年間、連綿として續いたハワイのカメハメハ王家は、米國の陰謀によつて亡び、これに替つて假共和政府が設立された。假共和政府といつても、ハワイ國人がそれを代表するのではなく、最初から計畫的にハワイ併呑の陰謀をめぐらした米國人によつて實權を握られた。

氣骨あるハワイ國人は、王黨を組織して陰謀に對抗し、いついかなる事態が發生するか分らぬ

危機を孕んできた。

ハワイには、二萬五千餘人の日本人が居住してゐるが、假政府は日本人に對して好感を持たずむしろこれを强壓した。

それといふのは、カメハメハ王家は日本を唯一の友邦とし、英邁なカラカワ王（滅亡の悲運にあつた女王リヽオカラニの御兄）は、日本を訪問されて、將來日本帝國の庇護のもとに獨立を完うしたいといふ意味ふかい意志を表示されたほどであつたが、明治二十四年一月二十一日御年五十五在位十七年にして病歿せられたので、この話も中絶した。

カラカワ王には、子女がなかつたので、王妹リヽオカラニガ第八世の國王となられた。米國はこの機を逸せず、憲法改正といふ名目のもとに市民大會を開き、多數決によつて王家を廢絶させてしまつた。つまり、米國は日本の庇護によつて獨立して行かうとするハワイ國へ先手を打つて自國の領土化しようとしたのである。

これは先づ何よりも武力を以てハワイを抑へねばならぬとあつて、米國聯合艦隊司令長官少將スカーレツトが、軍艦ボストン、モヒカン、アリアンスの三艦を率ゐてホノルル港内に乘込み、

陸戰隊を上陸させて、假共和政府に反對する王黨の鎭壓にあたつた。

わが政府は、在留邦人保護のために軍艦浪速をホノルルに派遣し、さらにサンフランシスコにあつた軍艦金剛を增遣した。

これでホノルル港內には、帝國軍艦二隻、米國軍艦三隻が碇泊し、このほかに英國軍艦が一隻、その附近に碇泊してゐた。

邦人を保護することは、とりもなほさず米國人——殊に、その海軍の壓迫を排除することである。で、勢ひ軍艦と軍艦との睨み合ひとなるのであつた。

だが、東鄕艦長は三隻の米國軍艦を一瞥すると同時に、心の中では「いざといふ場合には、浪速一隻で十分だ」といふ確信を持つた、東鄕艦長の明智神のごとき洞察力は、裏の裏まで看破しなければ已まなかつた。この洞察力があつたればこそ、あの日本海海戰における大勝を博したのである。

浪速は、ホノルルへ入港の際慣例によつて、碇泊中の米英軍艦に對して禮砲を擊ち、米國軍艦はたゞちに答禮の禮砲を擊つたが、英國軍艦チャンピオンは答禮をしなかつた。

わが浪速の將士は怪しからぬことだと思つたが、實はチャンピオンには日章旗の持合せがなかつたので、ボートをおろして米國軍艦に日章旗を借りに行つたのであつた。そして漸くその前檣に日章旗を揭げて禮砲を發砲したのであつた。

艦內に日章旗を所有してゐなかつたといふことは、それだけ日本を認めてゐなかつたといふことである。大東亞戰爭で、日本海軍のために散々に叩きのめされてゐる英國軍艦と思ひあはせて有爲變轉の甚しきに驚かざるを得ない。

しかしそれは嚴密にいへば、英國艦隊が衰退したのではなく、日本海軍が短時日の間に、それと比較にならぬほど强大化したことに原因してゐる。

東鄕艦長は、ホノルル入港と同時に、ハワイ國駐劄の藤井領事を招いて、ホノルルの情勢を聽いたが、その結果、米國兵がわが物顏にホノルル市を橫行濶步してゐることに對して、示威運動をなす必要があると認めて、さてこそ陸戰隊の上陸となり、星條旗の引きおろしとなつたものである。

泳いで來た脱獄者

東郷艦長は、陸上で示威運動をやるとともに、また海上でも示威運動をやつた。

ホノルルに入港してから間もない頃、浪速は錨をぬいて港外に出た。米英軍隊は何のために出港したか疑問をいだいたが、やがて殷々たる砲聲が浪速に起つた。演習を始めたのだ。

浪速の演習は、次の日も〳〵行はれた。米國軍艦はこれを氣にやんで、演習を中止してもらひたいと抗議してきた。

けれども、東郷艦長は平然として、

「公海で演習するのは自由である。敢て第三國の干渉をうくる筋合のものでない。」

と言つて突を放した。

浪速は、帝國海軍中堅の二等巡洋艦で、三千七百九噸、速力十八節、乘員三百五十餘名、艦載砲は二十六糎砲六門、十五糎六門で、ホノルル碇泊中の米國の何れの軍艦にも優つてゐた。殊に東郷艦長の「一發一中の砲一門は、百發一中の砲百門に匹敵す」といふ信條のもとに猛訓練をうけたのであるから、正確無比である。

米國艦隊も、浪速の性能をよく知つてゐたので、强壓的に演習中止を申入れるのではなく、歎願的に申入れたのであつた。けれども東郷艦長は頑としてこれに應じなかつた。

このため日米兩艦の形勢は急に險惡となつたが、丁度この時、日本政府は金剛に對して歸還を命じた。金剛艦長は、いま引きあげてもよいかと心配しながら東郷艦長に訊いたが、

「絶對に心配無用！」

と、確乎たる自信を示して、金剛が引きあげる際には、眞珠灣沖まで見送つて行つた。

ある日の朝のことである。

東郷艦長は、キャビンの椅子に凭れて、その日のホノルル新聞を讀んでゐると、突如、陸地に慌しい人の騒ぎが起つて、一人の男を大勢で追ひかけてゐた。すると、追ひかけられてゐた男は彈丸のやうに棧橋に駈けつけたかと思ふと、ざんぶとばかり海中に飛込み、鮮かな拔手をきつて浪速を目がけて泳いで來る。

東郷艦長は、双眼鏡をとつて眺めると、海に飛込んだ男は紛れもなく日本人で、海岸に立つて

口惜しさうにこれを見送つてゐるのは監獄の看守であつた。
（脱獄だな。）
東郷艦長はさう思ひながら、泳ぐ日本人が何處へ行くかと注意してゐると、やがて浪速の舷側に泳ぎついて、しきりに救ひを求めた。
「あの男、救つてやれ。」
東郷艦長は部下に命令した。
救ひあげられた男は、疲勞のためくたくたになつてゐたが、艦長の前に出ると、元氣を恢復して、與へられた葡萄酒を甘さうにぐツと飲み乾した。
「どうしたのだ。」
艦長は、劬るやうに徐ろに口を切つた。
「オアフ監獄を脱監しました。」
「何の犯罪で入監してゐたのだ。」
「私はマウイ島でパインアップルの栽培をやつてをりましたが、納屋頭の男が、日本人でありながらアメリカ人の園主とぐるになつて、私達日本勞働者を壓迫しますので、義憤を起してその納屋頭を殺し、二十一ヶ年の懲役に處せられて、オアフ監獄に收容されました。……はい、名前は今田與作と申します。」
「なぜ脱獄したのだ。」
「王朝時代まではさほどでもありませんでしたが、假共和政府ができましてから、日本人に對する殘虐ぶりは、とてもお話になりません。犬猫よりも甚しくなりました。それで機を見て脱獄しようと考へてゐましたが、監獄の中にも日本の軍艦浪速が入港して、艦長さまがたいへん在留日本人のためにお力を入れてゐらツしやるといふことが傳はりました。これこそよい機會が到來したと喜びまして、けさ早く他の囚人と一しよに珊瑚礁にある懺悔所を出て、檢疫事務所で働くため市街に向けて行くうち、看守の隙をうかゞつて脱走したのであります。」
今田與作はまだ三十歳前後で、その眉宇の間に溢れてゐる精悍の氣は、
（この男なら、毛唐とぐるになつて、日本人を虐める奴に對して義憤を起すだらう。）
と思はしめた。

「よろしい。話がつくまでこの艦に乘つてゐろ。」

東郷艦長は優しく言つた。

間もなく、ボートに乘つた米人警官が五六名浪速に漕ぎつけて東郷艦長に面會を求め、脫獄囚人の引渡しを要求した。東郷艦長はこれらの警官を武士的に鄭重に取扱つて、うまいコーヒーを御馳走したりなどしたので、警官たちは安心しながら、諄々と脫獄者の不都合を述べた。

東郷艦長は、彼等の話を聽き終ると、靜かに口を開いて、

「私は、ハワイの日本人全部を保護するためにホノルルに來たのである。だから、私は浪速に救ひを求めてきた日本人を引渡す譯にゆかぬ。」

と、嚴かに宣言した。

彼等は、この意外な返答に驚いてすご〳〵と引きあげ、こんどは衞兵司令官や、警視總監や、警保局長などが、入り代り立ち代りして今田與作を受取りに來た。しかし、東郷大佐は「返せません」の一點張であつた。

最後には、副統領デーモンがハワイの新聞に東郷艦長を恫喝する記事を掲げさせておいて、何喰はぬ顏で東郷艦長を訪れた。それでも東郷艦長は應じなかつた。

ハワイの英字新聞は殆ど筆を揃へて東郷艦長を攻擊したが、然しダイアリー・パシフイツク・コンマーシャル・アドヴアタイザー紙だけは、さすがに正論を述べた。曰く、

日本とハワイとの間には、罪人引渡條約が締結されてゐないから、日本の軍艦は罪人返還に對して、當國政府に應ずる必要はない。假に浪速が商船であつたならば、ハワイの法律に服從すべきであるが、國家的主權を有する軍艦の場合はこの限でない。浪速は日本の法律の支配をうけてゐる日本領土の一つであつて、單に一時的に當港に延長してゐると見るべきである——と。

全くその通りである。

そしてこれは、東郷大佐が、國際法に明るかつたことから、この態度に出たのであつた。

東郷大佐は、さきに臺灣における清佛戰爭を視察し、當時フランスの工兵大尉であつたジョッフル（後の元帥）の案内で占領後の基隆砲臺などを見て歸國して以來、殆ど三年間といふものは病難つゞきであつた。

四十一歳から四十三歳にいたる三年間で、明治二十年から二十二年にわたつてゐた。この時代は男の厄年といはれてゐるが、東郷大佐もまたこの厄年を免れなかつた。

別に重態といふ譯でもなく、何となく體の調子が悪かつた。つまり更年期に起る一つの生理的現象であつた。

この三年間、東郷大佐は湯ヶ原、鹽原、熱海などの溫泉に湯治に出かけ、その療養先で一生懸命に國際法を勉强した。それがこんにち役に立つたのである。

後で述ぶる高陞號擊沈なども、東郷大佐にこの國際法の知識が十分であつたから、あの大膽なことが出來た。

けれども、日本政府はこの脫獄者庇護のために、日米間に面倒な問題を起したくなかつたので東郷艦長に對して返還するやうに命令してきた。

本國政府の命令とあれば致方ないと、頑張り通してきた東郷艦長も、遂にその脫獄者を手放すことにした。その時の東郷艦長の心境は察するに餘りある。

東郷艦長は藤井領事を呼んで、

「この男は假政府に渡すのではありません、あなたに渡します。それから先はあなたの意志どほりにして欲しいが、東郷の眼の屆かない處でやつてもらひたい。」

と、浪速をたよりにして脫獄して來た日本人を深く憐んだ。

その後、今田はどうなつたか。たとへ再び元の獄舍に歸つても、あの東郷艦長の偉大な庇護は肝に銘じて忘れなかつたであらう。そして、米國官憲としても、東郷艦長の眼が光つてゐる間よしんば本國に歸還しても、無茶な取扱ひはしなかつたであらう。

東郷艦長は、薩藩の海軍士官から帝國海軍の士官となるや、直ちに英國留學を命じられて、二十五歳の春から、三十二歳の春まで足かけ八年間を英國で海軍を學び、明治十一年五月二十二日横濱入港の軍艦比叡で歸朝したが、凡庸な人間であつたならば、歐米の文化に心醉し、あるひはこれに威壓されて萎縮するのであるが、東郷艦長はこの八年間の留學によつて、却つて歐米の弱點と日本の强味を知り、從つて歐米に對して少しもひけ目をとらないばかりでなく、むしろこれを神州大和民族の資質に比べて劣るものとしてゐた。

われらつら〳〵思ふに、東郷平八郎は勿論のこと、勝海舟にしても、伊東祐亨にしても、前に

述べた山本權兵衛にしても、はたまた加藤寛治にしても、その他「くろがねの巨人」と稱さるゝ人々は歐米の科學に學ぶべきものはあるとしても、その民族性や、精神文化にいたつては、遙に彼等を凌駕してゐるといふ信念を持つてゐた。

しかも、こんにちにおいては、その科學においてさへも、歐米の水準を拔き、特に兵器においては比較にならぬほどの著しい進歩發達を示してゐる。

無敵海軍建設のために盡した先覺先輩の靈よ、以て意を安んずべしだ。

金と土塊の差

明治二十七年七月二十五日の朝であつた。

東郷平八郎を艦長とする軍艦浪速は、僚艦吉野（巡洋艦四、二一六噸）、秋津洲（巡洋艦三、一五〇噸）とともに、朝鮮の牙山近海を北に向つて航行してゐた。

日清の國交は全く決裂となつて、已に戰時狀態に這入つてゐたが、まだ宣戰の布告は渙發されてゐなかつた。

この時、豐島方面から二隻の清國軍艦が現はれた。

東郷艦長は、双眼鏡で凝視すると、紛れもなく清國軍艦廣乙（巡洋艦一、二〇〇噸）と、濟遠（巡洋艦二、三〇〇噸）であつた。何れも物々しい戰鬪準備を整へてゐる。彼等は、明かに日本軍艦と一戰を交へる覺悟であることが分る。

双方の距離は、すでに三千五百メートルに近づいた。この時敵艦は小癪にも戰鬪旗を揭げた。

黃海の眞夏の波は、反射鏡のやうにぎら〳〵と光つて眼を刺すやうだ。朝鮮半島の山々は、神秘の沈默に閉されて、靜かにこの兩國艦隊の行動を見まもつてゐる。

三千メートルに接近したとき、濟遠の前艦橋の巨砲が一閃したと見る間に、巨彈は飛んで浪速の舷側を掠めた。

吉野に坐乘してゐる第一遊擊隊の坪井司令官は「擊方始め」の信號旗を揭げた。

待ちかねてゐた我が三艦の巨砲は、天地が崩れ落ちるかと思はれる轟音とともに、正確無比な巨彈を打ち込んだ。

敵艦は、最初日本の艦隊何するものぞと見縊つて、二隻で日本軍艦三隻に双向つてきたのだが

廣乙は忽ち猛火に包まれて傾斜を始め、方向を轉じて北方へ逃げ、殘る濟遠もまたわが巨彈をうけて逃げだした。

秋津洲艦長（上村彦之丞少佐、後の海軍大將で、日本海海戰の殊勳者）は廣乙を追ひ、吉野と浪速は濟遠を追つた。

伊東祐亨司令長官の率ゐる本隊は、滿を持して他の方面に控えてゐた。

廣乙は、カロリン灣まで逃げのびたが、逃げることに慌てたゝめ岩礁に乘りあげて動けなくなつたところへ、秋津洲の巨彈をうけて火藥庫が爆發し、千二百噸の艦體は、眞ッ二つに割れた。

吉野と浪速が、逃ぐる濟遠を追つてゐるうち、左方はるかの洋上から、淸國の砲艦と、これに護衞された一隻の運送船が進んできた。運送船には、明かにユニオン・ジャックの英國旗を掲げてゐるが、甲板に犇めきあつてゐる人間は、淸國の陸軍であることが、双眼鏡の中にハッキリと認められた。

そこで坪井司令官は、浪速に向つてあの怪船の取調べと、砲艦の擊沈にあたれと命じ、さらに濟遠を追つて北上した。

濟遠は吃水の淺いのを利用して淺海に乘りこんで逃げまはり、吉野は吃水が深いためその淺海に乘り入ることが出來ず、殘念にも長蛇を逸した。

元來、この濟遠は非常に逃げ足の早い軍艦で、後で行はれた黃海の海戰の際にも、一戰をも交へずして、雲を霞と逃げ去つたので、さすがの淸國艦隊司令長官丁汝昌も憤りだし、艦長方伯謙は軍法會議にまはされて銃殺された。

「見敵必殺」の帝國海軍の傳統的精神に比べると、正に金と土塊との差だ。

東鄕、英國船を擊沈す

一方、怪船の取調べにあたつた浪速は、その帆桁に國際信號旗を揭げて、

「直ちに止れ。」

と命令した。さらに耳よりする信號のため、二發の空砲を放つた。

怪船は、速力を緩めて徐行したのち、間もなく停船した。時に午前九時であつた。

浪速は、續いて

「錨を降ろせ。」

といふ國際信號旗を掲げた。

怪船は、これに對する誠實な回答として、ガラ〳〵と錨を降ろす音が、波を渡つて聞えてきた。

（これでよい。）

と思つた東郷艦長は、この怪船を護衛してゐた敵の砲艦を擊沈するため行動を起したが、砲艦はこの信號中の隙を見て、運送船を見棄て、全速力で遁走した。

ところが、その行手にあたつて、廣乙を血祭りにあげて手持無沙汰になつてゐた秋津洲がゐたので、直ちに拿捕されてしまつた。この砲艦は操江（五百五十噸、速力九ノット）であつたが、この拿捕艦乘組員の審問によつて、敵の艦隊の情勢が手にとるやうに分つた。艦は小さくとも、その收獲は大きなものであつた。

東郷艦長は、英語のうまい分隊長人見善五郎大尉に、怪船へ行つて取調べよと命じたので、人見大尉は直ちに十數名の部下を引率して怪船に赴くべくボートの用意をしてゐると、

怪船から、

「前進せんとす。よきや。」

といふ國際信號が掲げられた。

東郷艦長は、その無謀に驚きながら、たゞ「止れ」の信號を掲げた。

午前十時四十分、人見大尉一行のボートは、穏かな波を辷つて、怪船の舷側に着いた。怪船から白人の船員が、舷門の梯を降ろして一行を鄭重に迎へた。

だが、清國兵は何れも、殺氣を帶びて、青龍刀に手をかけてゐる者さへある。

船長は、英人トーマス・レイダー・グラスワーシイといふ溫厚な五十格好の男であつた、

人見大尉は、先づ船長に向つてその船籍證明書を提出させた。それによると、この怪船はロンドンに本店を置く印度支那汽船會社の所有船で、高陞號（一、三五〇噸）と分つた。

「何處を出發して、何處へ行くのだ。」

人見大尉は嚴然として言つた。

「太沽を出發して、牙山に行く途中。」

「何と何を積載してゐるか。」
「清國兵一千百名と、十四門の大砲、それから少量の糧秣」
「清國の軍隊とは、どんな關係にあるか。」
「單に傭はれてゐるだけです。」
「已に日清兩國の間に戰鬪が行はれたことは知つてゐるか。」
「さきほど、濟遠が逃ぐる途中、操江に向つて信號してゐるのを見て承知した。」
「それでは、敵國の軍隊や兵器を積んだ船が、どうなるかは分るだらう。」
「よく分ります。」
「浪速に隨行しろ。」
「もちろん、覺悟してをります。」
人見大尉は、歸艦して東鄕艦長に臨檢の模樣を悉く報告した。
「第三國の國旗の袖に隱れて、敵の眼を眩まさうとするのは、卑怯な軍人がよくやる手だ。すぐに隨行するやうに信號してくれたまへ。こんなことで長い時間をつぶすのは勿體ない。」

東鄕艦長は、他の清國艦隊の出動に備へるため、早くこの場を切りあげたかつた。
「錨をあげよ。而して浪速に隨行せよ。」
浪速に信號旗があがると、高陞號には折返して信號があがつた。
「重要の用件あり、ボートを送られたし。」
とある。
そこで、人見大尉は再びボートに乘つて高陞號へ行くと、艦長は舷門まで降りてきて、乘船しない方がよい。無智な清國兵は、どんな危害を加へるかも知れないと注意して、
「大沽へ歸ることを許してもらひたい。清國兵は絶對に隨行することを許さない。もし隨行のために船を動かしたら、その前に私たちヨーロッパ人は殺されるであらう。」
と哀願した。
もちろん東鄕艦長がこれを許可する筈はなかつた。
高陞號では、清國兵がいきり立つて評議をしてゐた。
「どんな亂暴な日本軍艦でも、英國國旗を揭げた運送船を擊沈するやうなことはすまい。もしそ

んなことをしたら、日英戰爭となるから――。」

「こゝで戰鬪が始まつても、浪速には僅か三百人あまりの軍隊しか乘つてゐないが、こつちには千人あまりの軍人がゐるから勝利はこちらのものだ。」

と、北叟笑んでゐる。

それを聞いた船長は、

「浪速の一發の砲彈は、この汽船を擊沈するに十分だ。そんな幼稚なカラ威張りをしないで、素直に隨行した方がよろしい。」

と言つた。けれども彼等は承知しなかつた。

かくて高陞號は遂に錨を拔かなかつた。

また、高陞號にボート送れの信號があがつた。しかし、東鄕艦長はその必要なしといつて、

「速かに船を見棄てよ。」

との信號を送つた。

それは、むろん船長らに對する信號であつた。

東鄕艦長は時計をのぞいて、已に午後一時を過ぎてゐるのに驚きながら、いよ〳〵最後の斷を決行することにした。斷とはいふまでもなく擊沈である。

將校たちは、國際公法の書籍などを持出して、その可否を論じてゐる間に、東鄕艦長の肚は已に決まつてゐたのだ。これも、ハワイにおける東鄕艦長の一見意表外のごとき行動が、すべて嚴肅な國際法に基くものであつたと同じく、やはり國際法に照らして何等の間隙がなかつたものである。

東鄕艦長は、艦橋に立つてじツと高陞號を見詰めてゐる。

年齒已に四十八、漸く圓熟してきた風貌の中にも、凜乎として冒しがたい威嚴と、滿々たる鬪志が包藏されてゐる。

東鄕艦長は、この時の決意について、後年人に問はれた際、

「自分は、自分の行動に日本の未來の生命が懸つてゐることを知つてゐた。しかし自分は自己の生命をもつて、これに答へたのである――。」

と語つた。

恐らく東郷艦長は、この行爲が母國日本へ累を及ぼすやうなことがあつたならば、いさぎよく屠腹して、その全責任を引受けたのであつたらう――と、有名な日本研究家のロイド教授は述べてゐる。けだし、これは東郷艦長の心境をよく知る言葉であるといへよう。

「直ちに撃沈せよ。」

東郷艦長の命令は下つた。停船命令を發してから、實に四時間十五分を過ぎた午後一時十五分である。同時に、浪速の前橋に危險を豫知させる赤信號が揭げられた。これも終始浪速の命令に忠實であつた船長らに對する警告であつた。

「撃方始め」の號令と共に、五發の大砲が高陞號の胴腹を抉り拔き、後方から次第に沈沒し始めた。

船長らは、逸早く救命器を身につけて海中に飛込んだが、清國兵のうちには、小銃を執つて浪速に手向つてゐる者があるかと思ふと、われ先に飛込んだ清國兵や、ヨーロッパ人の船員を打ちまくつてゐる者もある。

浪速は、船長らを早く救助したかつたが、清國兵の狂氣じみた最後のあがきのため近寄れず。

午後一時四十六分、高陞號が全く水中に沒して、僅にマストの頂端だけを殘し　のを待つてカッター二艘を漕ぎだして船長らを救つた。

船長らは、親切に取扱はれたのち、佐世保に送られた。

それから十六年の後、依仁親王殿下に隨行して、英帝の戴冠式に參列したその頃、東郷元帥は日本海海戰の大勝によつて、一躍世界的英雄として世界の尊敬を受けてゐたが、その青年時代に學んだウースター號の卒業生たちが、東郷元帥のため、盛大な歡迎會を開いた。

その歡迎會が始まらうとする時、記憶のない一英人から一通の手紙が屆いた。すぐに開封してみると、

「私は、十六年前高陞號撃沈の際、軍艦浪速に救はれた船長グラスワーシイです。私は浪速に收容された時、已に貴下と私とは因緣淺からぬ關係にあることを知つた。即ち私は貴下より二期遲れてウースター號を卒業したからであつた。

私は、その時この話をしようかと思つたが、かゝる緣故に縋るが如く思はれるのも心苦しかつたからである。

今日の歡迎會には、當然私も出席すべき資格を有してゐるが、高陞號事件に顧みて、遺憾ながら遠慮いたし、貴下の御健康を祈る」

といふ意味を認めてあつた。

東郷元帥の腦裡には、十六年前のあの息の詰るやうな光景がまざ〳〵と蘇つて、敗戰の老友を痛ましく思つた。

◇

高陞號擊沈事件については、果然騷然たる國際問題が惹き起つた。

英國東洋艦隊司令長官中將フリーマントルは、自ら帝國海軍の根據地に伊東聯合艦隊司令長官を訪問して、浪速の行爲を詰つた。

伊東長官は、聞くだけ聞いて、

「貴下のお話は東郷に傳へませう。」

と、輕くあしらつた。

英本國では、朝野を擧げて、浪速艦長の攻擊をなし、日本に對して國交斷絶をせよと昂奮する者もあつた。

それよりも、なほ騷いだのは日本の首腦者であつた。時の總理大臣伊藤博文のごときは、

「東郷といふ男は、何といふ馬鹿の奴だらう。累を國家に及ぼすことに氣づかないのか……。」

と、かん〳〵になつて憤慨し、その他政府要路の人々も、伊藤首相と同樣に憤慨し、狼狽し、ほとんど顏色がなかつた。しかし、海相西郷從道や、軍令部長樺山資紀などの海軍首腦者は、

「東郷のやつたことには間違ひはごわせん。」

と、平然としてゐた。

果して、英國にも正論がぽつ〳〵現はれだして、國際法の權威ホルラント博士をはじめ、ウエストレーキ博士などが、ロンドン・タイムスに寄書して、

高陞號事件が起つた時は、已に日清兩國が戰端を開いた後であつて、高陞號の船員がそれを知ると知らざるとに拘らず、戰時の取扱ひを受けるのは當然である。

その時、英國旗を揭揚してゐたか否かは取るに足らぬ一些事にすぎない。

高陞號には、日本の軍隊を攻擊する目的で牙山に向ふ淸國兵を滿載してゐた以上、これを防禦

するために出征した日本軍艦が撃沈するのは當然すぎるほど當然である。

と、たゞ徒らに感情的に昂奮してゐた英國民に告げたので、英國は始めて冷靜を取りもどし、高陞號撃沈事件はこゝに一段落を告げた。

そして、日本の朝野はこゝに更めて東郷艦長の豪さを知つたのである。

東郷長官の樂園

東郷司令長官の率ゐる聯合艦隊の主力隊は、旅順のいかなる高地からも視野のきかない水平線下に游戈して、僚艦からの無電を待つてゐた。

明治三十七年四月十三日の明け方のことである。

やがて、淼々たる東方の水平線から、大日輪がくる〳〵と回るやうにして昇つてきた。

東郷大將（明治三十七年任官）は、毎朝のやうに身を清めて太陽を禮拜した後、一と通り朝の仕事が終ると、旗艦三笠のキャビンに行つて、ゆッくり煙草を喫つた。東郷大將には、この一と時が戰爭中の最も樂しい時間であつた。

大將は壁間に掲げてある旅順沖海戰の油繪や、聯合艦隊が颱風を冒して行進する油繪などを眺めてゐた。前者は東郷家の書生が描いたもので、東郷大將はこれが殊のほか氣に入つてゐた。後者はある專門の畫家が描いたものを特志家が寄贈したものであつた。

このキャビンは極めて簡素であつた。二脚の古びたテーブルと、回轉椅子とソーファが一脚づゝあつて、舷窓には潮風に褪せた水色のカーテンが無雜作にかゝつてゐる。それが却つて將軍の武人のキャビンらしい雰圍氣を漂はせてゐた。

このほかには、戰爭の記念品だの、友人や全國の東郷崇拜者などから贈られたいろ〳〵の品物が飾られてあつた。

戰爭の記念品の中には、旅順沖海戰の際、東郷司令長官の寸前で炸裂した、拳大の彈片もあつた。

東郷大將は、この部屋ではなるべく頭腦を使はないことにした。それは、次ぎの活動のために必要な精根の培養と頭腦の休養を目的としたからである。

だが、海を見、波の音を聽けば、ひとりでに過ぎ去つた五十餘年の思ひ出が次ぎ〳〵に湧きあ

がつてくるのであつた。しかしその思ひ出に耽ることもまた大將の慰めの一つであつた。

東郷大將は、人も知るとほり、鹿兒島市の加冶屋町に生れた。このサムライ屋敷町からは、西郷南洲を始め、西郷從道、大山巖、黑木爲楨など日本の陸海軍の元勳を贈つてゐる。

その屋敷町の一角を甲突川が流れ、その河原は柔かい砂地になつてゐる。彼等はこの砂地でよく相撲をとつた。背丈が小さい仲五郎（大將の幼名）は、强い方ではなかつたが、いつも氣力で勝つてゐた。

仲五郎は十四歳の時は藩の書役として出仕し、一ケ月玄米三斗俵一俵を與へられた。十四歳の少年の月給としては、決して安い方ではなかつた。彼は、それを父東郷吉左衞門の生活の資に充てゝゐた。吉左衞門は藩の典型的良吏であつたが、文久三年六月英國の艦隊が生麥事件の償金を求めて鹿兒島に押寄せた時には、

異國の船くつがへせ諸人の祈る誠を知れよ神風

と詠んで、その鬱勃たる敵愾心を示した。

薩英戰爭のさいには、平八郎は十七歳であつた。

彼は、長男四郎兵衞、三男壯九郎（平八郎は四男）とともに、旗本勢として藩主の本營詰となつた。兩刀を帶して、火繩銃を肩にしながら奮戰した彼の姿は、天晴な若武者振りであつた。

彼は、その姿を胸に描いて、ひとりで微笑ましくなることが度々あつた。

慶應二年、兄弟三人揃つて藩の海軍局に入り、翌年には大久保利通らが京都御所を警護の任にあたるため上京するさい隨員として赴き、乾御門の警護にあたつた。その立場はこんにちの陸戰隊のやうなものであつた。

慶應三年十二月の下旬、江戸の薩摩屋敷が佐幕派の兵隊のために燒打にされた上、藩の軍艦翔鳳丸が、幕艦回天と品川沖で一戰して兵庫に入港した時には、東郷平八郎は翔鳳丸で江戸から來た伊東祐亨らから、その海戰の模樣を聞いて、將來の海戰に對する大きな參考とした（この事は伊東祐亨の項で詳述してある）

翌年――明治元年一月一日、西郷南洲は幕艦との海戰免れ難いと見て、藩艦春日の艦長に豪勇赤塚源六を、副長に伊東祐亨の兄伊東祐麿と、さらに東郷平八郎ら五六名の俊傑を新たに士官に任じて戰備を整へた。

果して、一月四日の朝になつて、藩艦と幕艦との海戰が起つた。

その時、兵庫港には幕艦は榎本武揚の坐乘する開陽を旗艦として、蟠龍、翔鶴、順動、富士山の五隻がゐたが、薩艦は春日、翔鳳と運送船平運丸がゐた。

翔鳳は、伊東祐亨の項で述べたやうに、その備砲は全く用をなさないまでに破壞され、平運丸も兵庫で幕艦のために攻擊されてよほど傷んでゐたので、戰鬪のできるのは春日だけであつた。

薩艦は、三日の夜陰に乘じて他の二艦船とともに兵庫港を脫出した。それは、戰鬪力を失つた翔鳳丸と平運丸を、優勢な幕艦の包圍圈內から脫出させるためであつた。

夜が明けはなれた頃、榎本武揚の坐乘する開陽は、まつしぐらに薩艦を目がけて追ひかけ、阿波沖にさしかゝつた時には、双方の距離は二千八百メートルに接近した。

そこで赤塚春日艦長は、戰鬪力のない翔鳳丸と平運丸には自由行動によつて、この場を遁れるやうに命じ、春日一艦だけで幕艦を引受けることにした。しかし、春日を追ひかけて來たのは開陽だけであつた。

後の元帥井上良馨は、井上直八として春日の砲手を勤めてゐたが、先づ彼によつて第一彈が發射された。續いて三番司令官として左舷四十听砲を掌つてゐた東郷平八郎は、先づ一彈を見舞つた。その彈丸は見事に開陽の急所に命中した。

開陽も猛烈に發砲したが、春日の命中率の高いのに驚いたのか、深追ひをせずして引きかへしてしまつた。

この海戰に、開陽の大小二十六門の備砲から發射した砲彈は百發に近かつたが、春日に命中したものはたゞ一發だけで、それも外輪を掠めたゞけであつた。春日から擊つた砲彈は三十八であつたが、それも命中したのは東郷平八郎が擊つた一彈と、他の士官が擊つた二發だけであつた。

かくて阿波沖の海戰は終つた。

先行した翔鳳丸は、阿波の由岐浦で坐礁したので、伊東らは「もはやこれまでだ。愚圖々々してゐたら幕艦に拿捕される」といつて、自ら火を放つて燒きすて、全乘員陸地にあがつて危機を脫した。

その後の宮古港の官幕海戰、函館沖の官幕海戰、英國留學、ハワイ事件、黃海海戰——東郷大將の腦裡には、恐らくかうした思ひ出が涯しなく續くのであらう。

幕僚たちは、よくこの長官の氣持を知つてゐたので、長官がキアビンにある間は、よほどの急用がない限り、この樂園を荒らさないことにしてゐた。

しかし、東郷大將は自分の居室にかへると、好きな愛煙をくゆらしながら、ある時は思索にふけり、ある時は特異な海圖をひろげて作戰を練つた。けふも、東郷大將はキヤビンから自室に歸ると海圖を見詰めながら、一心不亂に作戰を練つてゐた。

「長官、出羽司令官から電報が參りました。」

ノツクすると同時に、急いで這入つてきたのは參謀であつた。

「何といつて來たか。」

「マカロフ中將の旗艦が、殆ど旅順の全艦を率ゐて出動したといふのです。」

と、その電文を渡した。東郷大將は一讀して、

「いよ〳〵こちらの思ふ壺に這入つたのだね。」

と、謹嚴な顏が僅かに綻んだ。そして

「直ちに全艦隊へ出動の命令を發したまへ。」

言ひ終るや否や、東郷大將は双眼鏡を首にかけて三笠の艦橋へ、どツしりとした足どりで上つて行つた。

旅順港外の勝鬪

この日の未明、わが出羽艦隊（第三戰隊）の驅逐艦は、旅順の港口近く攻め寄つて、敵の驅逐艦と戰つてその一隻ストラシヌイを擊沈した。

敵の巡洋艦バヤーンらは、日本驅逐艦を攻擊するため港外に出てきたが、出羽艦隊の千歳（出羽艦隊司令官出羽重遠少將坐乘）や吉野らの雄姿を見るや、あわてゝ港內に逃げこんだ。

このだらしない味方の敗戰ぶりに憤慨した敵將マカロフ中將は、かん〳〵になつて憤つた。そして彼は自ら旗艦ペトロパウロウスクに乘つて、麾下セバストポリ、アスコルド、ヂイヤーナ、ノーウキク、ポベーダなどの巨艦を率ゐて、出羽艦隊を擊破すべく港外へ出た。

先頭のノーウキクに續く敵旗艦の檣頭には、戰鬪旗と司令長官旗が揭げられ、威風四邊を壓する右先鋒單梯陣である。

マカロフは、露國ばかりでなく、世界海軍の名提督として聲名を謳はれ、青年將校時代には露土戰爭に參加し、水雷艇を率ゐて敵の軍港に侵入し、水雷攻擊によつて敵艦を屠つたといふ鬪將である。

日露開戰と同時に、彼は當然旅順のロシア東洋艦隊の司令長官となる立場にあつたが、當時の國內的情勢は、彼のために甚だ不利であつた。そしてスタルク提督が司令長官となつたが、開戰以來彼は敗戰つゞきだつたので、露國皇帝はこゝに始めてマカロフを起用することになり、明治三十七年三月八日に旅順に到着した。

マカロフが旅順に到着した當座は、スタルクはまだペトロパウロスクに總旗艦旗を揭げてゐたので、マカロフは遠慮して單に自身の將官旗だけを輕巡洋艦アスコルドに揭げてゐた。

だが、このアスコルドの將官旗を仰ぎ見た露國の將兵は、あたかも勝利のシンボルのごとく歡び、帽子を脫いで嚴かに十字を切つた。そして、それまで意氣沮喪して全く戰意を失つてゐた彼等は急に元氣を取りもどして活氣づいた。

東鄕大將も、卒直にこの事實を認めたのであつた。同時に、いかにして早く彼を屠るかといふことについて深思熟慮した。その居室で、愛煙をくゆらしながら、特異の海圖を按じつゝ、すでにその作戰は成つたのである。

東鄕大將が、なぜ敵の旅順艦隊の擊滅を急いだかといふ理由は、敵將マカロフがあくまで旅順に蟠居して、早晩東洋へ廻航するバルチツク艦隊と協力して、積極的攻勢に出ようとしてゐる肚の中を見透したからである。

いかに强力なわが艦隊でも、新鋭のバルチツク艦隊と、マカロフの到着によつて意氣軒昂たる旅順艦隊を同時に擊破することは策の得たものではなかつた。だから、なるべく早く旅順艦隊を片づけてしまひたかつた。

東鄕大將は、マカロフがその滿々たる鬪志にまかせて、屢々港外に出て戰つた時、その港內への歸路が必ず老鐵山下のルチン岩の西方であることを知つた。

（よしッ、あそこへ水雷を敷設してやらう。）

東鄕大將は、この前日（十二日）、わが海軍水雷の權威である軍令部參謀小田喜代藏中佐に、ルチン岩の西方に機雷を敷設するやうに命じた。

小田中佐は假裝巡洋艦蚊龍丸（二、七〇〇噸、速力十五節）に、可なり多くの機雷を積んで、わが驅逐艦に護られながら、その夜のうちに敷設してしまつた。つまり、ルチン岩の西方一帶は完全に機雷原になつたのだ。

それとも知らぬマカロフは、勇みたつた麾下の艦隊を引具して、出羽艦隊を擊つべく午前八時半ごろ出港したのである。

港口には、軍神廣瀨武夫中佐らによつて、閉塞船が沈められてあるが、今はすでに露國艦隊によつて取除かれ、自由自在に出入ができるやうになつてゐる。

出羽艦隊の千歳と吉野らは、强敵を怖るゝもの〻如く裝づて、砲擊をしながら後退した。露國艦隊はこれにます〳〵氣負つて、遂に港外十五海里の地點まで追ひかけてきた。

これこそ、東郷大將が深思熟慮の末に練りあげたマカロフ誘殺の作戰で、驍名一世を壓するマカロフも、まんまとその策謀に引ッかゝつたのだ。

けれども、さすがは世界の名提督といはれるだけのマカロフである。

「あの勇敢無比な日本艦隊が、さほど抵抗もせずして、ずん〳〵沖合へ退がつてゆくのは、敵の主力の側へ誘ひだすためである。深入りは禁物だ。」

と思ひついた時には、早くも濛氣の中から旗艦三笠をはじめ、朝日、富士、八島、日進、春日敷島、初瀨の八巨艦が堂々たる英姿を現はしてゐた。

（東郷といふ男は、恐ろしい戰略家だ。）

マカロフは、初めて東郷大將の底知れぬ明智叡慮に驚いたもの〻如く、ぞッと身震ひをした。そして彼は直ちに「退却」の信號を揭げた。

わが聯合艦隊の主力は、マカロフ麾下の艦隊を一擧に殲滅するため全速力で追ひかけたが、敵との距離が遠く、その上敵は死地を遁れるため一生懸命であるから、殘念にも着彈距離まで追及することができなかつた。

わが艦隊は、あまり追及すると旅順砲臺の着彈圈內に這入るので、手頃の地點まで追つて、敵艦がわれ先にと入港しようと焦つてゐる樣を見送つた。

東郷大將は、旗艦三笠の艦橋に佇立して双眼鏡をあてながら、逃げゆく敵の航路に注意した。

「やつぱり、ルチン岩の西へ廻るやうです。」

東郷大将の側近く立つてゐる参謀長島村速雄大佐が、双眼鏡を覗きながら言つた。

「ウーム」

大将は、輕く答へて、なほ熱心に凝視してゐる。動かざること巖のやうだ。

幕僚の参謀有馬良橘中佐、参謀秋山眞之少佐、参謀松村菊雄大尉、副官永田泰次郎少佐、機關長山本安次郎機關大監なども、ひとしく双眼鏡をあてながら、計畫の成功を念じてゐる。

まさに息詰るやうな一と時である。

敵艦は、いよ〳〵わが機雷原に差しかゝつた。

午前十時三十分、空はどんよりとした花曇である。

しかし、何れの艦も何事もなくそこを通過してゐる。

(敷設が拙かつたのかな。)

幕僚たちは誰もさう思つた。

だが、その次の瞬間、先頭に進んでゐた旗艦ペトロパウロウスクの舷側から、一團の黑煙がむく〳〵と盛りあがると同時に、マストの尖端よりも高い大水柱が立昇つて、瀧のやうに艦上に崩れ落ち、はるかに距れた三笠の艦橋にも、眞近に聽く落雷の響のやうな轟音が傳つた。

續いて旗艦に三發の轟音が起り、黑煙は黃色に變り、さらに赤色に變つた。司令長官旗は爆煙に煽られておのゝいてゐる。

「萬歲、萬歲。」

わが各艦の甲板には、一齊に勝鬨があがつた。

かうして一萬九百六十噸の一等戰艦は、わづかに二分間で轟沈した。時に十時三十二分である。

マカロフを始め、これと運命を共にした將兵約七百名、その中には有名な戰爭畫家ヴレスチヤギンも加つてゐた。彼は、この海戰を描くために便乘したのであつた。

彼の作品に「骸骨のピラミツド」といふ繪があるが、そのピラミツドの頂上には烏が止つてゐて、一見戰慄を覺えさせる。だが、彼は哀れにも自らその骸骨の山を海底に築くことになつた。

この乘組員の溺れる者を救ふために近づいてきた戰艦ポベーダもまた機雷にふれて大破し、辛うじて港内に逃げこんだ。

唯一の力と恃んだマカロフ提督を失つたことによつて、敵は再び戰意を喪失して收拾しがたい混亂狀態に陷り、命令系統も支離滅裂となつてしまつたが、これに反してわが艦隊は、それこそ本當の「勝利のシンボル」である東郷司令長官の下に渾然たる一致團結の力を發揮し、完全に旅順艦隊を殲滅して、やがて來たらんとするバルチツク艦隊との戰ひに備へたのであつた。

開戰寸前の名曲

バルチツク艦隊が、わが對島海峽に現はれた明治三十八年五月二十七日の數十分間は、日本が興隆するか、廢頽するかの岐路に立つてゐた。

そして、この興廢の鍵を握つてゐるのは、實にわが聯合艦隊司令長官東郷平八郎その人であつた。東郷大將の五十八年の生涯は、實にこの日、この時のために生き、かつ備へてきたものであつた。

この日の夜明け前、哨艦信濃丸から「敵艦見ゆ！」といふ無電に接した東郷司令長官は、たゞちに出動命令を下すと同時に、この旨を大本營に報告するため、參謀にその草案を書かせた。參謀は、

「敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直に出動之を邀擊せんとす。本日天氣晴朗なれども波高し。」

と書いて、これを長官に示した。

東郷大將は、その草案を一讀すると、參謀から筆を借りて、

「邀擊ではない。擊滅だよ。」

と、言つて、自らその字句を訂正した。

神將東郷の胸中には、已に敵艦擊滅の神算鬼謀が成つてゐたのだ。

この電文を受取つた大本營は、文意簡單ながら、東郷司令長官の必勝の信念と、當日の戰況を想像して、

「もう、これで大勝利だ。」

と、どッと歡聲があがつた。

大本營に、かうした確信を持たすやうになつたのは、特にその電文の「本日天氣晴朗なれども

波高し」といふ最後の一句であつた。

なぜならば、わが艦隊は本年一月一日陸海軍協力の下に、完全に旅順を攻略して以來、專らバルチツク艦隊との一戰に備へて猛訓練をなし、ことさら波の荒い日本海や玄海灘で射擊演習をやつた。

波の高い海では、なか〳〵照準が定まらぬものである。況やバルチツク艦隊はこれまで實戰の經驗がないので、波の高い海上にきたが最後、盲擊ちと同樣である。それに天氣晴朗であればわが艦隊の視野も廣く、照準は一段と正確となつてくるのだ。

實にこの短かい電文の中には、わが哨艦の成功が含まれてをり、その間における十分な戰鬪準備が窺はれ、わが聯合艦隊の意氣衝天の慨が磅礴してをり、さらに前述のやうな我が艦隊に有利な條件までが判斷されるやうになつてゐる。いかなる名文家でも、これだけの表現を咄嗟の間に書き綴ることは困難であらう。

この草案を書いた參謀の名はハツキリしてゐないが、恐らく秋山眞之中佐であつたらうといはれてゐる。

黃海海戰後、聯合艦隊の幕僚は殆ど全部變つたにもかゝはらず、秋山中佐（後に中將となる）は影の形に添ふがごとく東鄕司令長官の身邊にあつて、重要な任務にあたつてゐた。惜しむらくは、五十一歲の若さで長逝した。

續いて、信濃丸から第二の警報が達した。曰く、

「敵艦隊二〇三地點に見ゆ。東水道に向ふものゝ如し。」

わが艦隊の勇士たちは、

「また二〇三地點か。」

と、思はずニツコリした。

それは、旅順の二〇三高地が陷落したのが旅順の運命を決定的ならしめたことを連想して、こんどのバルチツク艦隊も、やはり二〇三地點で擊滅するものと信じたからである。

海軍は、何から何まで科學的に處理さるゝが、一面にはかうした緣起についても決して無關心ではない。例へば日清戰爭の黃海海戰に先だつて、わが軍艦に鳩の群が舞ひおりたり、舷側に大きな海鯉が浮びあがつたりしたことを此の上もない瑞徵として歡んだことが、やがてその

勇氣を振起させた一つの理由ともなつたのである。そして勝つたのだ。

東郷大將は、太陽に向つて發砲しないといふことを戰ひの信條としてゐるが、それが偶然であつたにしても、未だ曾て大將は太陽の輝く方向に向つて發砲したことはなかつた。こんどの日本海海戰も亦、太陽に向つて發砲することなく、太陽を背にして敵と戰つたのであつた。

偶然といへば、偶然であるが、これは理外の理であり、また神が大將の至誠に感じて、交戰上きはめて有利なかゝる機會を惠んだのであらう。

根據地の鎭海灣を出た聯合艦隊は、沖の島の北方二十海里の地點で敵を待受けてゐると、敵は東郷艦隊の豫定通り午後一時三十九分に至つて姿を現はした。いよ〳〵決戰の時刻が迫つてきた。午後一時五十五分、旗艦三笠の檣頭高くZ旗があがつた。

「皇國の興廢此の一戰に在り各員一層奮勵努力せよ。」

との信號だ。

さうだ。正しく皇國の興廢をかけた此の一戰だ。これを仰ぎ見た全艦隊の將士は、肅然襟を正して一死報國を心に誓つた。實に森嚴そのもの〻一と時だつた。

單縱陣をなしたわが艦隊は、速力を緩めて徐々に南西に向つた。敵は全速力で北東に向つてゐる。舳に碎け散る波の音と、艦底から傳はる機關の響が、常になく大きく聞える大事を前にして緊張の極致だ。

この時、何處からともなく、神韻縹渺たる尺八の音が聞えてきた。

「のんきな男もあるものだな。」

全艦隊の勇士たちは、この喰ふか喰はれるかといふ場合に、のんきに尺八を吹く男の氣が分らなかつたが、それでもあまりの妙曲にじつと耳を澄ました。

曲は高く低く、あるひは斷續し、時に朗々として士氣を皷舞し、あるひは切々として慰むるが如く、一轉して凄愴、皆を決せしめ、餘韻嫋々として、全艦の勇士をして恍惚の境地に誘ひこんでいつた。

やがて尺八の音はぴたりと消えた。再び波の音と機關の響が高まつてくる。

初めて我にかへつた勇士たちは、

「誰だらう。」

と、その尺八の主の心意氣を思ふた。

後で分つたことだが、これは淺間艦長八代六郎大佐（後の大將）が、大事を控えて緊張しすぎることは、却つて大事を過る惧れがあるといふ心遣ひから、その緊張をほぐすためにした意味深長な一曲であつた。

世に、八代提督を「尺八艦長」と呼んだのはこのためである。

午後二時、彼我の距離はすでに八千メートルに接近した。

東郷司令長官は、一文字吉房の軍刀を帶びて、いつものやうに三笠の艦橋に佇立して、双眼鏡を手にしながら、默々として熱心に敵の様子に注意した。その微動さへも見のがすまいとして、その崇高な姿は、正に武神の權化であつた。

一方、敵の司令長官ロジエスト・ウエンスキーは、この日恰も露國皇帝の戴冠記念日であつたゝめ幕僚とゝもにシャンパンを拔いて祝杯を擧げ、快い微醺を帶びて艦橋に立つてゐたが、いよ〳〵決戰が近づくと見るや、艦橋から安全な司令塔の中へ下りて行つた。

一は最も危險な艦橋に立つて全軍を指揮し、一は最も安全な司令塔の中に隱れて全軍を指揮せ

んとする——すでにこれだけでも勝敗の決が定つた譯だ。

彼我の距離が凡そ七千メートルに接近した時、突如東郷司令長官の右の手が、さツと左へ打ち振られた。

側にゐた加藤（友三郎）參謀長（後の元帥大將）は、長官の意を體して、

「取舵一杯！」と叫んだ。

「伊地知彦次郎艦長（後に中將となり、砲術と水雷艇の改良に功績をあげた）は、我とわが耳を疑ひながら、

「取舵ですか？」

と問ひ返した。

舷側を敵に見せて、その面前で、左へ轉換をする大冒險であるから、海戰の常道からいへば、誰しも疑はざるを得ない。

だが、司令長官の右の手は左へ振られたまゝになつてゐた。

敵は、この無謀轉換を見て大いに喜び、ロ提督幕僚の一大尉の如きは、

「一分間のうちに日本艦隊の主力艦を撃沈してみせる。」

と言つて、先頭の三笠が轉換を終つた頃から盛んに猛火を放つた。だが、それは一發も命中しなかつた。「天氣晴朗なれども波高し」だ。この大うねりの波では、未熟な敵の砲手の砲彈が當る筈がない。

この敵前大轉換は、外國の海戰史にも、戰術にもない日本獨特の丁字戰法であつた。これは八幡船の水軍が敵と戰つた體驗によつて編み出した海戰法で、敵の艦隊を傘で掩うやうに前路を遮り、やがて乙字戰法（これもわが祖先の水軍が編み出したもので、敵を前後と一方の側面から攻撃する戰法）に轉ずる前提であつた。

東郷大將は、世界のあらゆる海戰と戰法について十分の研究をしてゐるが、しかも日本人の祖先が編みだした丁字戰法や、乙字戰法が最も優れた戰法であることを知つた。むろん、それを應用するのは、時と場合によるのであるが、バルチツク艦隊の二列縱陣に照應して、この戰法を用ゐるのが最も效果的であることを知つたのである。

もし、バルチツク艦隊が他の陣形を整へてゐたならば、東郷大將はさらにそれに對應する戰法を用ゐたであらう。

この時のバルチツク艦隊の勢力は、戰艦八隻、巡洋艦九隻、驅逐艦九隻、假裝巡洋艦一隻、特務艦船六隻、病院船二隻、合計三十八隻であつた。わが艦隊は主力艦十二隻を始め、ほゞこれと同勢力であつた。

果してわが聯合艦隊は、東郷長官のいはゆる「百發一中の砲百門は、一發一中の砲一門に同じ」といふ訓練によつて鍛へあげられた妙技を發揮し、決戰三十分間のうちに、その總旗艦スワロフは大破（夕刻沈沒）し、その他の各艦とも殆ど沈沒又は傷つき、已に勝敗の決が定つた。旗艦に坐乘してゐた司令長官ロ提督は負傷して、翌二十八日驅逐艦で逃ぐるところを捕虜にされ二十七、二十八兩日の戰鬪で擊沈せられたもの十九隻、拿捕されたもの五隻、遁走後破壞または沈沒したもの二隻、中立國に逃げこんで武裝を解除せられたもの六隻、抑留されたもの二隻、捕虜となつたものロ提督以下六千百六名、戰死者約四千三百名に及び、文字どほりバルチツク艦隊は殲滅した。

これに對し、我が方の損害は、僅かに水雷艇三隻の沈沒と、百十七名の戰死者を出したゞけで

あつた。

こんにち、大東亞戰爭におけるわが聯合艦隊司令長官として赫灼たる武勳を樹て、英名世界に轟く山本五十六大將は、實にこの海戰における名譽の戰傷者の一人であつた。

當時、山本提督は東鄕司令長官の直率する第一艦隊の第一戰線旗艦日進に少尉候補生として乘組んでゐたが、戰鬪開始とともに、砲術長從屬として首に苗頭尺修正板をかけ、前艦橋の右端に佇立してゐたが、轟然として起つた爆音と同時に瞠とばかり甲板に倒れた、手からも足からも血が噴きだしてゐる。

この時、司令官三須中將は右眼をつぶされ、航海長は後頭部をやられて仆れ、參謀松井中佐は名譽の戰死を遂げた。

山本少尉候補生は、下甲板の負傷者收容所へ運ばれ、たゞちに軍醫の手當をうけたが、右手の指二本は已に彈片のためにもぎ取られ、右足のふくら脛の肉は、猛獸の爪で引ッ掻かれたやうにむしり取られてゐた。

けれども、神はこの若き海の勇士に神州日本の將來の艦隊を託するためか、その後經過極めて良好にすゝみ、再び艦上生活をするやうになつた。

日本海海戰については、なほ幾多の記すべきことがあるが、こゝにはたゞ東鄕司令長官のこの戰鬪における一端を記すことにとゞめた。

伊勢大廟に參拜

日露戰爭が終つて、東鄕大將は麾下の艦隊を率ゐて横須賀へ凱旋する途中、乘艦を伊勢灣に入れて上陸し、伊勢大廟に參拜した。

東鄕大將は、日露開戰の大勝利はひたすら「天祐神助」によるものと信じ、その御禮のために參拜したのであつた。

森嚴きはまりなき大廟の神前に額いて、心からなる感謝を捧ぐる東鄕その人の敬虔な瞳には、伊勢灣の眞珠よりも尊く美しい涙が光つてゐた。恐らくその胸中には、人こそ知らぬ滂沱たる感激の涙が、瀧のごとく流れてゐたであらう。

東鄕大將は、戰後伊東祐亨大將のあとをうけて軍令部長となり、戰功によつて功一級金鵄勳章

並に菊花大授章を授賜せられ、次いで伯爵（後侯爵）を授けられた。大正二年元帥府に列して元帥號を賜はり、翌三年には東宮御學問所總裁を仰附けられ、こゝに一切の公職から退いて、ひたすらその大任遂行のため誠忠を盡くした。大正十五年十二月には、わが國最高の勳章である菊花頸飾章を下賜され、臣下としてこの上もない光榮に浴した。

これより先（明治四十四年六月）元帥は英帝の戴冠式に依仁親王の隨員としてロンドンに赴いたのを機會に、英米を一巡したが、英米の國民は「第二のネルソン」として熱狂的歡迎をした。これはアングロ・サクソンがその誇とするネルソンの次に東郷を置かうとする氣持の現はれであるが、事實において東郷元帥はネルソン以上の戰術家であり、愛國者であることに對して、彼等はことさらに眼を閉ぢたのであつた。

その證據にはネルソンの魂を繼いでゐる米英の艦隊と、東郷の精神を傳承する帝國海軍と比べて、何れが優れてゐるかは、こんどの大東亞戰爭における海戰によつて雄辯に立證せられてゐるではないか。

それはともかく、その人の生存中に、東郷元帥ほど世界的聲名を謳はれた人は古今稀である。

神將東郷、聖將東郷、ネルソン以上の東郷、武神の權化東郷――どんな讃辭でも、東郷元帥の武勳と盡忠報國の誠と、そしてあの莊嚴な人格を表徵するに足らない。

治めて亂を忘れず

昭和十四年五月二十七日、横須賀で日本海海戰二十周年記念の祝典が行はれた。著者は、その祝典に參列するの光榮を得た。

元帥の口髭も頤鬚も、すでに銀の如く光つて一層の莊重美を加へ、終始伏目がちの眼は、折から爆音勇しく海上に向つて急降下する飛行機を眺めるときに、はじめてその炯々たる眼光が覗かれた。航空機が新たに海戰の新鋭武器として加つたのを見て、元帥は二十年前の海戰と比べて今昔の感にたへないやうであつた。

この日の參列者に對して、日露海戰で最大の威力を發揮した各戰艦、巡洋艦の副砲十五糎砲の砲口面を模造した額縁の中に「治而不忘亂」と東郷元帥の筆になる書が挿入してあつたのを贈られた。

多くの人は、これを「治にゐて亂を忘れず」と讀んでゐたが、著者がその後齋藤七五郎提督（日本海海戰の勇將）に會つた時、談たま〳〵この書に及ぶと「東鄕元帥は（あれは治めて亂を忘れずと讀むのぢや）と申されてゐた。元帥はまことに漢籍にも造詣が深かつた。」

と語つた。

治めて亂を忘れず――これこそ元帥の信條であり、また「勝つて兜の緒を締めよ」を意味するものであり、さらに、元帥が平素人に訓した「油斷大敵」の警鐘である。

わが帝國海軍は、實にこの元帥の信條を信條として、これまで總ての部面にわたつて血みどろの努力を續けてきたのであつた。それが、こんにちの大戰果となつて現はれてゐる。

元帥は、昭和九年の海軍記念日の翌日、喬木の倒るゝがごとく靜かなる太往生を遂げたが、十七歳の若さで薩英戰爭に參戰して以來、その臨終の寸前までわが海軍の强化に盡し、その一生は全く帝國海軍の生ける歷史であつた。しかもその英魂は永久にわが帝國海軍の守護神として天翔つてゐる。

あゝ、偉大なる一生！

純忠至誠、半世紀を海軍に奉じた

武人の典型 加藤寛治

貧家の明朗兒

神田猿樂町の棟割長屋の一軒に、

「お仕立物洗張を致しまする。」

と、優しい女文字で書いた看板が掲げられてあつた。

見るからに貧しい生計の家であることが分るが、半疊の床の間には、海軍大尉の軍服とその帶劍が飾られてあり、三十を少し出たばかりの女主人は、この界隈で見うける井戸端會議の雄辯家たちとちがつた上品さを持つて、甲斐々々しく縫針を運んだり、火熨斗をかけたりして、十二歳

を頭に四人の男の子を育てゝゐるさまは、何かしら由緒ある家柄のやうに思はれた。

「お母さんたゞ今。」

威勢のいゝ聲とともに、ガラリと格子戸を開けて歸つてきたのは長男の寛治であつた。

「お歸んなさい。」

母は、禮儀正しく玄關に迎へて、限りなき慈愛の瞳を送つた。それは、わが子の自尊心を保つためと、父なし子といふ僻を持たせないとする努力であつた。その深い心遣ひが酬られて、寛治はいつも明朗であつた。

「けふ、學校の先生のお話では、こんど海軍兵學校の豫科生徒を募集するさうですが、僕も試驗を受けてみたいと思ひますが……。」

寛治は少年らしい冴え〳〵した瞳を輝かしながら言つた。

「お父さんも、寛治だけはぜひ海軍にしたいとおつしやつてゐたし、いま通つてゐる攻玉社も、その準備のための勉強ですから、さつそく手續をしなさい。」

「その受驗者には資格が必要ですつて。」

「どんな資格が……。」

「准士官以上の海軍軍人の遺子弟に限るといふことです。」

「それならば、お前は立派な資格者ぢやありませんか。お父さんは海軍大尉で亡くなられたから。」

母と子はありし日の夫を、父を偲ぶやうに、じッと床の間の軍服を覗いた。

この少年こそ、後にわが帝國海軍の海軍大將、軍令部長となつて、曉名を一世に謳はれた加藤寛治その人の十二歳の春の姿であつた。

父の直方は福井藩の藩士で、青年時代勝海舟らの主宰するところとなつてゐた長崎海軍傳習所の第二期生として入學し、その後海軍中尉となつて海軍省出頭を命ぜられ、芝伊皿子町に住つてゐた。

寛治は、六歳で芝御田小學校に入學したが、その同級生には、これまた後の海軍大將、海軍大臣となつて、わが海軍の重鎭となつてゐる安保清種（その頃は澤野庚次郎といふ姓名であつた）がゐて、二人は殊のほか仲よく、高輪に住つてゐた庚次郎は、毎日のやうに寛治を誘つて一しよ

に登校した。明治八年のことで、その頃は電車も自動車もなかつたので、二人の幼な友達は大手を振つて愉快に學校へ通つた。

明治十一年三月、直方は横須賀の東海水兵本營分隊長（大尉）となつて横須賀へ轉任することになつたので、家族も横須賀へ移住することになつた。

寛治は、四年間親しみあつた竹馬の友澤野庚次郎と別るゝことが何より悲しかつた。

「庚ちやん、とき〴〵手紙をくれたまへ、ねえ。」

「寛ちやんもね。」

いよ〳〵寛治が學校を下る日、二人は校庭の一隅に、人目を避けて泣きながらしみ〴〵と語つた。

後年、二人が轡を並べて海軍大將となつたときにも、少年時代の友情は少しも變らず、加藤大將がロンドン海軍軍縮問題で奮闘したときなどは、安保大將は蔭になり、日向になつて竹馬の友のために盡したのであつた。

宿望の兵學校入學

横須賀に引越してから、寛治は汐入小學校に通つた。

こゝの教師に小泉といふ十七歳になる、先生がゐた。上級の生徒とあまり年齢がちがはぬので生徒たちから兄のやうに慕はれ、小泉先生はまた生徒たちを弟のやうに可愛がつた。東京から轉校したばかりの寛治は、親しい友達もなかつたので、小泉先生はよく寛治に目をかけて、氣を引きたてるやうにした。

この小泉先生は、後に遞信大臣となつた小泉又次郎である。

寛治少年が漸く横須賀の空氣にもなじんできたころ、父はふとした病氣のため亡くなつた。

清廉で、己を遇することに薄かつた直方には、少しの遺産もなかつた。妻の須磨子は、十二歳の寛治を頭に二男功（八つ）、三男直麿（三つ）、四男藤麿（二つ）の四兒を抱えて暗澹たる思ひをしたが、氣をとり直して、石に嚙りついても四人の男の子を立派に育てあげて、生前の夫の言葉にしたがひ、長男は海軍に入れて、お國の爲めに捧げたいと氣なげな決心をした。

そして、直ちに東京に引越して最初は本郷に住ゐ、間もなく今の神田猿樂町に移つて、仕立物と洗張の看板をかゝげた。仕事が誠實で、そのうへ上手であるといふところから、仕事はいくらでもあつた。須磨子は、これならば自活の道が立つといふ確信を得るとともに、一生懸命になつて働いた。これを見かねた近親の人が、寛治を官廳の給仕に出したら何うか、さうすれば生活費の足しにもなるしとすゝめたが、須磨子は言下に峻拒して、海軍兵學校の豫備校であつた芝新錢座の攻玉社（攻玉社中學の前身）に入れた。

また須磨子は小さい子供たちのために素讀、習字、算數などを敎へ、また寛治には「孝子萬吉傳」といふ傳記小說風の本を買つてきて與へた。それには萬吉といふ少年が、貧苦の中にも身を持すること堅く、奮鬪努力の末、世にも名だゝる長者になつたといふことを書いてあつた。こゝにも、わが子を思ふ母の深い思ひやりがあつた。

偉人の蔭には、必ず賢母ありといふが、加藤寛治といふ偉人を日本に贈つた須磨子もまたその典型的賢母であつた。

ある日、寛治はいつもよりも更に元氣よく歸へるや否や、

「お母さん、うかりましたよ。」

と、海軍兵學校豫科の入學試驗に合格したことを告げた。

母は、飛びたつばかりに悅んで、

「それはよかつた。お父さんがどんなにお悅びになることでせう。」

と、さつそく母は亡き夫の位牌に燈明を點けて、生ける人に物いふやうに、寛治の合格を報告し、母子二人で合掌した。

「それからお母さん、も一つ悅しいことがあります。お母さんは庚ちやんを御存じでせう……ほうら、芝の伊皿子にゐたころ、一しよに御田小學校に通つた澤野君ですよ。」

「あ、あの澤野の坊ちやん。」

「その澤野君が、やはり僕と一しよに合格したんです。」

「それは、重ね〳〵悅しいことばかり……お互に力になつて、どんなに氣强いか分りません。」

母は、その日の夕食に赤飯を焚いて、わが子の新しい門出の第一歩を祝つた。

豫科生徒の入學式は、明治十五年九月十八日に、築地の學校で行はれた。未來の海軍士官の雛

鳥たちは、輝かしい希望に小さい胸を躍せてゐた。入校者は全部で二十四名（受驗者數百名）、その中には澤野庚次郎の安保清種、後の海軍中將松村龍雄などがゐた。

試驗は可なりむづかしかつた。殊に漢文はみんなの受驗者に一ばんの苦手であつたが、寛治はその鄕里福井の先覺者橋本景岳（左內）を崇拜して、その著書「啓發錄」をいつも愛讀してゐたので、漢文の試驗は彼にとつては、むしろ優しいものであつた。

校長は、最初は川村純義（後の海軍大將）であつたが、間もなく伊東祐亨元帥の兄伊東祐麿少將になつた。

この伊東祐麿といふ人は、薩摩の海軍建設に功勞のあつた人であるが、常に一藩の海防よりも日本の海防强化に志してゐた眞の愛國者であつた。

明治二十年九月、豫科五ヶ年の全課程を終へて、加藤、安保、平賀（德太郎）の三人は、成績優秀のため褒賞を授與された。

同年同月、本科へ入學して第十八期生徒となつた。翌年の夏休中に、兵學校は海軍操練所、兵學寮と長く親しんだ築地から江田島に移轉した。新學期開始とともに、全校生徒三百餘名は、品川から山城丸に乘つて江田島に着いた。

古鷹山を背景として、瀨戸內海に臨む清淨そのものの聖地江田島の木の香も新しい校舍に這入つたときは、更に新たな希望と勇氣が全身に湧きあがつてきた。

明治二十四年七月十七日、豫科を通じて前後九ヶ年間の兵學校生活を終り、加藤は本科卒業生六十一名のうち、首席で卒業し、直ちに少尉候補生となつた。同期生には、後に大將、中將となつた安保清種、吉田清風、松村龍雄、佐藤皐藏、下村延太郎など多士濟々であつた。

噫、わが軍艦旗

明治二十四年九月二十日の朝、練習艦比叡は、これから遠洋航海に出る少尉候補生たちを乘せて、初秋の朝風に颯爽たる軍艦旗をひるがへしてゐた。

海軍省軍務局長の伊東祐亨少將は、一同を激勵するため艦上を訪うて一場の訓示をして、その青年時代に薩艦鳳翔に乘つて、この品川灣で幕艦回天と一戰をやつた思ひ出話などをして、一同の若い血を湧かした。

比叡は、太平洋の波を蹴立てゝ、先づ南洋のグワム島を訪れた。こんにち、大東亞戰爭の戰果として、皇軍に占領されてゐる島だ。それからニューギニアを經て濠洲のシドニーに入港した。こゝは先任の英國艦隊司令官の旗艦オランド號その他の軍艦が碇泊してゐた。

比叡がこゝへ碇泊中のことであつた。

夕方になつて軍艦旗を降ろすときは、その港に碇泊中の先任軍艦に整合旗が降ろされた後、國別のいかんを問はず、それから五分間の後に、降ろすといふ習慣になつてゐる。ところが、ある日のこと、その時刻になつても先任の英國旗艦には整合旗が降ろされなかつた。

すると、この日の當直將校であつた砲術長山下源太郎大尉（後の大將）は、

「安保（清種）候補生、軍艦旗を降ろせ。」

と命令した。

「まだ、旗艦の整合旗が降りません。」

安保候補生は、その慣例に從つてから言つた。

山下大尉は聲を勵まして、

「いや、構はぬ。降ろせ。」

と、嚴かに命じた。

比叡の艦上には、軍艦旗の降下式による小銃の空射につゞいて、「君が代」の吹奏が起り、軍艦旗は肅々として降ろされつゝあつた。

この時、艦上にあつた艦長森又七郎大佐（後の少將）は、銃聲と喇叭の音に驚いて式場へ駈けつけ、

「宿直將校は誰だ。まだ旗艦の整合旗が降りないぢやないか。」

と咎めた。

すると、山下大尉は肅然襟を正して、

「艦長、旗艦に倣ふことはよく承知してをります。しかし軍艦旗の揚げ下げは、元來獨自のものです。先任の艦に倣ふのは、單なる儀禮にすぎません。候補生の教育のため、この儀禮を無視して、軍艦旗の取扱ひの眞の意味を徹底させたいと思ひましたので、獨自の行事として降ろしたのです。」

と答へた。

「さういふ意味でやつたのか。結構ぢや。」

森艦長は、緊張した顔を綻ばした。

そばでこの軍艦旗降下を見、山下大尉、森艦長の話を聽いてゐた加藤候補生は深い感銘に打たれた。

軍艦旗は、「君が代」の吹奏の裡に肅々として降りた。この時の軍艦旗の尊嚴にして美しかつたこと、仰ぎ見る全候補生の眼には言ひ知れぬ感激の涙が光つてゐた。

練習艦は、それからマレー、マニラ、香港を經て翌年四月十日品川灣に歸つた。この航程一萬三千二百七十餘マイル、加藤候補生は克明にその日〳〵の日誌をつけてゐるが、これが後年南進政策の上に非常に役に立つたといふことである。

その後、加藤候補生は、軍艦浪速の分隊士としてハワイに赴いた。

浪速艦長東郷平八郎大佐が、ハワイ政廳に掲げられた米國國旗を引降ろさせたことや、ハワイ港外で演習をやつたことや、さらに邦人の脱獄者を庇つて、アメリカ官憲を凹ました話などは、

東郷元帥の項で詳しく述べたが、加藤候補生はこれらの出來事からもやはりシドニー港の軍艦旗問題と同じやうな深い感銘をうけ、米英に對する認識を新たにしたのであつた。

また、後年中佐時代に山本權兵衛大將の隨員として歐洲を訪問したさい、山本大將が獨帝カイゼルに謁見して、堂々とわが海軍魂を說いた雰圍氣の中に浸つて、わが海軍の先輩が、歐米の先進國に對して少しも臆するところのない態度を思ふにつけても、わが國の朝野があまりに歐米なかんづく米英に對してあるひは恐れ、あるひは崇拜するが如き態度を意氣地なく思つた。

戰前の露都を衝く

「海軍に育つて、陸上勤務とは殘念だ。何とかして海へ出て戰爭がしたいものだ。」

日清戰爭開始と同時に遠征海軍根據地砲臺附となつて、朝鮮全羅南道の長直路の砲臺に釘付けにされた青年將校たちは、明け暮れ黃海の波を眺めながら脾肉を嘆じてゐた。加藤少尉は、その中で最も殘念がつてゐる一人であつた。

ところが、その希みが叶つて、彼は軍艦橋立の航海士となつて威海衞の攻擊に參加し、力戰奮

闘して、勳六等單光旭日章を賜つた。

凱旋後、海軍砲術練習所學生を仰せつけられた。明治三十八年十二月で二十六歳であつた。

その翌年には、村田千代子と結婚した。これは、すでに老境に這入つた母の手助けや、幼い弟たちの面倒を見てもらふことが第一の目的であつた。

その頃から已に日露一戰を免れずと見たわが軍部は、事前にロシアの實情を研究しておくために、陸軍からも海軍からも、優秀な人材を露都に派遣した。

加藤寛治大尉は、露國留學の辭令をうけて明治三十二年露都に向つた。翌年には駐在武官となつたが、先任將校として陸軍の田中義一少佐（後の大將）がゐていろ〳〵と指導してくれた。

その後、海軍から廣瀨武夫少佐（後の軍神廣瀨中佐）が駐在武官としてやつてきた。

廣瀨少佐は、海軍士官學校の第十七期生で、加藤大尉よりも一年早く卒業したが、在學中は肝膽相照す仲であつた。だから、話にも隔てがなかつた。

「廣瀨、その髯は何だ。」

公使館で會つた最初の挨拶がこれであつた。

廣瀨少佐は兩の頰から頤にかけて鐘馗のやうな髯を喰ひかぶつてゐた。

「この髯には、曰く因緣があるんだ。」

廣瀨少佐は、徐ろに頤髯をしごきながら、漆黑の髯の森の中から、白い齒をちらつかせつゝ笑つた。

「勿體ぶらずにその因緣とやらを白狀したまへ。」

「これは、三國干涉による遼東還附のときの痛恨の記念物だ。あの遼東半島が再び日本の手に還るまでは斷じて剃らぬ。」

ぎゆッと唇を嚙みしめて、空の一角を見詰めた廣瀨少佐の眼には、涙が一ぱい溢れてゐた。

「廣瀨、同感だ。」

かう言つて、加藤大尉も聲を顫はせながら、

「そして、われ〳〵はいま三國干涉の張本人であるロシアの心臟部にきてゐるのだ。しつかりやらう。」

と、よき先輩が來たことを、心の中で感謝した。

加藤大尉は、すでに日常の用を達すぐらゐのロシア語は自由にできるやうになつてゐたので、新參の廣瀨少佐を伴つて方々を案内したり、あるひはロシアの將校や、顯官の邸宅などにもさかんに出入した。ところが、廣瀨少佐の髭は、ある人には歡迎されるが、人によつてはいはゆる毛嫌ひをしてこれを疎んじ、殊に人の注意を惹きやすくて、その任務遂行の上に邪魔になることが多かつた。そこで廣瀨少佐は、

「遺憾ながらこの髯を剃る。しかし遼東半島は必ずわれ〳〵の手で取りかへすぞ。」

と言つて、美しい口髭だけを殘し、あとは全部綺麗に剃り落した。

廣瀨少佐が髭を剃り落したことについては、ロシアのある良家の娘とのロマンスが傳へられてゐるが、恐らくそれは廣瀨少佐の傳記を面白くするために、後からこじつけたのではないかと思ふ。尤も、その娘とのロマンスはあつたやうだが……。

加藤大尉は在露三年中、專ら露語の勉強をすると共に、トルストイや、ゴーリキーや、アンドレーフ、ドストエフスキー、チエーホフなどの小說を好んで讀み、それによつてロシアの各階級の實情を知るところが多かつた。後年の加藤大將がロシア文學に明るかつたのは、この時の勉強によるものであらう。この三年間の露都駐在によつて、加藤大尉がロシアの國情を巨細に調べあげてきたことは、開戰に當つてどれだけ役に立つたか分らぬ。

日露海戰に死鬪

日露海戰のうち、日本海海戰に次ぐ大海戰は明治三十七年八月十日の午前十一時半ごろから開かれた黃海海戰であつた。

この時加藤寬治少佐は、聯合艦隊の旗艦三笠の砲術長として乘組んでゐた。

この日、ロシア東洋艦隊の提督ウキトゲフ中將は、戰艦六隻、巡洋艦四隻を主力とする全艦隊を率ゐて旅順を出港し、わが聯合艦隊の封鎖陣を突破して、浦鹽の露國艦隊のところへ合流する計畫であつた。それは、わが陸軍による旅順攻擊が熾烈となつて、その陷落も、もはや時日の問題となつてきたので、その前に旅順を脫出して、安全な浦鹽へ逃避し、東洋へ向つて進航中のバルチツク艦隊を待ち、一擧に日本艦隊を擊たうといふ甘い考へから來たものであつた。だから、敵も一生懸命だつた。

わが方は、旗艦三笠を先頭にして朝日、富士、敷島、春日、日進の序列で見事な單縱陣をつくり、このほかに出羽、片岡、東郷（正路）、梨羽の各提督が率ゐる諸艦隊が、敵の側面または後尾から敵を衝くべく思ひ〳〵の行動を起した。

火蓋は切られた。

彼我の砲彈は大空に唸つて、砲彈と砲彈とが空中で激突するのではないかと思はれるまでに猛烈を極めた。忽ち、敵艦の各艦から火災が起り、早くも戰列を脫する艦さへある。

三笠の前艦橋に立つて指揮してゐた加藤少佐は、

（廣瀨中佐の仇を討つてやる時が來たぞ。）

と、心の中で言つた。

廣瀨武夫中佐はすでに旅順港口の閉塞戰で、杉野兵曹長らと共に壯烈な名譽の戰死を遂げてゐた。遼東半島をわれ〳〵の手で取りかへすと言つた廣瀨中佐もその實現を見ずして死んだのだ。

（思へば無念である。）

加藤少佐はきッと敵艦を睨んだ。

激戰は續いて午後六時となつた。

海は、烈しい夕陽の光を反射して眩しく輝き、黑煙と、火焰と、水煙と、砲口の閃光との交錯は、人も海も一時に狂ひ出したやうだ。

この時、敵の十二吋砲の彈丸が、三笠の後部砲塔に命中して、わが十二吋砲は根本からぽッきりと切斷され、空中を唸つて海上に吹き飛ばされた。この時、畏くも分隊長伏見少佐宮殿下（後の元帥大將軍令部總長宮）を始めたてまつり、一時に十數名の死傷者を出した。

前艦橋の下に勤務してゐた大河原一等信號兵曹長（後の少佐、橫須賀の記念艦三笠の副監督）にはすぐこの事が分つた。そこで艦橋の左端に立つて指揮してゐる加藤少佐に、

「砲術長、後部砲塔が敵彈にやられて、宮さまを始め、多數の死傷者が出ました。」

と、報告した。

加藤少佐は、眉毛一つ動かさず、じッと敵艦を凝視したまゝ、默つて右手を指しのべ、大河原兵曹長に他言無用といふ意志を表示した。兵曹長も、すぐその意味を汲んで、戰鬪の終るまで沈默を守つた。

これは加藤少佐がこの大損害を知らせて將兵の士氣を沮喪させないやうにした注意ふかい心遣ひであつた。

「打方控え！」

突如、加藤砲術長の號令が下つた。

この激戰中に、打方を控えるのは少し變だと思はれるが、加藤少佐は砲手にしばらく休養を與へて、それからさらに猛射を浴びせることにして、時々この號令を下した。果して、三笠の砲彈は驚くほど命中率がよかつた。

午後六時を過ぎたころ、敵の旗艦ツレザレウキッチに、猛然わが巨彈が命中して、艦橋にゐたウキトグフ中將は卽死し、マセウツチは重傷を負ひ、艦長は戰死し、幕僚その他の將兵に多數の死傷者を出し、艦體は航行の自由を失つて、よろめきながら戰列を脫した。そして「本艦は指揮せず」との信號旗を揭げた。それもその筈だ。少佐がこれを指揮することになつたのだ。忽ち敵の陣形は無秩序の狀態に陷つてしまつた。

わが各艦には、どつと勝鬨があがつた。

しかし、死者狂ひになつた敵艦は、あたかもわが砲彈が敵の旗艦の首腦者を一擧に全滅した手並に答へるごとく、敵旗艦が戰列を脫して間もなく、その巨彈が三笠の艦橋に轟然として炸裂したのである。

その拳大の一片は、東鄕司令長官の顏面を距る二三寸の空中を掠めて艦橋に落ちた。

參謀松本直吉、高橋雄一の兩少佐は、この瞬間壯烈な戰死を遂げ、その前にひろげてあつた海圖は、血しぶきで眞紅に染つた。東鄕司令長官の右側近くにゐた加藤少佐は、爆風のために、足が掬くはれたやうであつたが、幸に擦り傷一つ受けなかつた。

松本、高橋兩少佐は、加藤少佐の同期生で、長い間苦樂を共にしてきた親友であつた。加藤少佐は、その悲壯な最後の姿を見ながら暗然として涙を呑んだ。

戰ひは、露艦の遁走によつて午後七時近くになつて終つたが、東鄕司令長官は後の戰ひに備へるため長追ひをせず、主力艦は東方の根據地に引きあげて、驅逐艦の追擊に任せた。

敵の旗艦は、慌てゝ旅順にも這入れず、膠州灣の青島近くに遁れたところをドイツ軍艦に發見されすつかり武裝を解除されてしまつた。全く慘めな敗北ぶりであつた。

血染の海圖に跋して

日本海海戰を前にして、加藤少佐は大本營海軍大臣副官を仰せつけられた。

加藤少佐としては、實戰に參加して奮鬪したかつたが、命令とあれば致方なかつた。

日本海海戰もわが艦隊の大勝となり、いよ〳〵平和が克復して、日露海戰に關するいろ〳〵の記念の催しが行はれた。

黃海海戰のさいの三笠の血染の海圖は、これを永久に保存することになつた。これに對して加藤中佐は左のやうな跋文を寄せた。

「……此の一戰に依つて、吾々は「戰爭は畢竟するに意志の戰ひなり。必勝を信ずる者必ず捷つ」の格言を徹底的に實證し、意氣既に波羅的艦隊を呑んで、爾後の猛訓練に邁進し、以て日本海海戰大勝の因を確立したのである。

東郷元帥の曾て述懷せられて曰く「日本海海戰において、あのやうな大勝を得たのは、黃海海戰が其の根本であると深く信じてゐる」と。將來軍の統率に任ずる者、深くこれを考究せば、

檢討の妙味津々たるものがあらう。予は日本海圖を見て今昔の感に堪へず、一言を跋とす」

この跋文の中に、特に將來軍の統率者になる人々に對して、戰爭は畢竟するに意志の戰ひであることを述べて、これを檢討するやうにすゝめてゐることは、大將の意圖が那邊にあるかを示すもので、自ら頭が下る。

第一次歐洲大戰には、特別南遣支隊の伊吹艦長として、英國東洋派遣艦隊と協力し、今日の大東亞海の制海權確保に奮戰し、特に濠洲とセイロン島間の、軍隊輸送船團の護衛任務に力をそゝいだ。

この頃、青島を脱出した獨艦エムデンは、神出鬼没して聯合國側の船舶を擊沈し、殊に英國の被害は最も多く、何とかして早くこれを擊沈したいと焦つた。だが、英國の軍艦だけでは何うすることも出來なかつた。加藤艦長は、エムデンの進路を明察してこれを壓し、英國軍艦シドニーその他をして、遂にエムデンに止めを刺さしめたのであつた。

もし、この時日本艦隊の協力がなかつたならば、英國の輸送船團は滅茶々々となつてゐたであらう。さらに又、第一次世界大戰に日本が中立を保つやうなことがあつたならば、青島の獨逸艦

隊は素晴らしい活躍をして、英國の東洋における勢力に一大脅威を與へるとともに、聯合國側敗戰の原因を作つたであらう。その脅威に晒されることもなく、歐洲の戰爭に專念することが出來たのは、全くわが陸海軍の奮戰によるお蔭である。

にも拘らず、咽元通れば熱さを忘れて、戰後には却つてわが國の恩に酬いるに仇を以てした。

大正七年のシベリア出兵には、加藤少將は第五戰隊司令官として浦鹽方面に出動して、陸軍との緊密な協力のもとに、赤軍を擊破し、大いにわが國威を發揚した。この時、米英も申譯の出兵をして他日の發言權に備へてゐた。

大正八年六月には、軍令部出仕となつて山本英輔大佐（現海軍大將）らと共に大戰後の歐米を視察し、軍事、政治、經濟、產業文化などの各部面にわたつてその犀利な觀察眼をもつて裏の裏まで洞察し、大きな土產を持つて翌年六月歸朝した。そしてその年の八月には海軍大學校長となつた。

この時、母堂須磨子は七十九歲、曾て神田の棟割長屋に他人の仕立物や洗張をしてゐた彼女は今や世にも時めく海軍大學校長の母として尊敬される身となつたが、往年の貧苦時代を忘れず、きはめて愼ましやかな、しかし穩かな樂しい日を送つてゐた。そして大正十五年七月、寬治が橫須賀鎭守府司令長官のころ、八十三歲の高齡で安らかな往生を遂げた。

五・五・三の比率に反對

前述のやうに、咽元をすぎて熱さを忘れた米英は、第一次世界大戰が終つた瞬間から、日本に對して强壓を加へてきた。

わが海軍は、將來米英との衝突免かれぬものと見て、これに備へるため八八艦隊を建設して、帝國海軍を强化することにし、大正九年の帝國議會にこの總豫算案十七億五千萬圓（八ヶ年間に繼續支出）を提案して議會の協贊を得た。

ところが米國は、現在でさへも實質的に世界第一の海軍兵力を持つてゐる日本が、この上に海軍を强化しては、太平洋を隔てゝ相對峙する米國にとつて一大脅威であると見て、その先手を打つて米國の音頭取で大正十年十一月に日・米・英等の九ヶ國による軍縮會議を開くことになつた。表面の理由は、戰後の民力を休養して戰後の復興に努め、大戰中から甚しく膨脹した軍費を

節減して、各國兵力の均衡を保つとともに、これによつて世界永遠の平和を確立するといふ虫のよい話であつた。

これに對して、わが國の一部には、恰も天來の福音のごとくこの提議を禮讃した者があるからその短見と、お人好には呆れざるを得なかつた。

しかも、彼等の謀略は頗る深刻をきはめ、わが國朝野の輿論をして、これを積極的に支持せしむるやうに仕向け、そして成功したのであつた。

尤も、米國のごときは、大戰に參加して以來、豫算は年を逐うて膨脹し、大正八年（一九一九年）には二百五十六億に達し、その約四割五分は軍事費に占め れたといふ狀態であつたから、個人主義、自由主義、享樂主義のアメリカ人は、「もう戰爭が終つたから、軍事費を減らせ」と政府に迫り、このため大統領ハーヂングも困りぬいてゐた。だから、一面この軍備縮小會議は、ウイルソンの後に立つたハーヂングが、その人氣取りの對內政策でもあつたのだ。

この尻馬や謀略に乘つて、ワシントン軍縮會議を崇高神聖なるものゝごとく考へ、あるひは宣傳したものが、わが國內の有力層にあるから寒心せざるを得ない。

しかし、わが國としては、もとより世界平和に貢獻することはその望むところであり、從つて各國がその均衡を保つ軍縮ならば敢て辭さない意嚮であつたから、全權委員に海軍大臣大將加藤友三郎と、貴族院議長德川家達を任じ、加藤寬治は海軍首席委員として、大正十年十月十五日橫濱出帆の鹿島丸で渡米の途につき、同年十一月二日ワシントンに着いて、同年十二月十二日から開かれた會議に臨んだ。

米、英、佛なども、第一流の人物を全權としてこれに臨んだ。

果然、米英は彼等の主力艦（戰艦、航空母艦）十割確保に對して、わが國に六割を強いてきたのである。

加藤寬治委員は、あくまで七割を主張して動かなかつた。本來ならば、同等の比率を保持したかつたが、四邊の情勢はそれを許さなかつた。だから、七割だけは斷然確保する覺悟で、終始頑張つた。

けれども、加藤友三郎全權は、日本の財界の狀態や、米英が今後主力艦を建造しないといふ條件などに鑑みて、涙を呑んで六割の比率――五・五・三の比率を承諾したのであつた。

加藤寛治委員は、齒ぎしりをして口惜しがり、かつ憤慨したが、もはや何うすることもできなかつた。

加藤友三郎全權とは同じホテルに泊つてゐたが、加藤全權は心配のあまり一日に何回も加藤委員の部屋を覗いて慰めた。

このことについては、加藤寛治委員も後で「加藤さんのあの氣持には感謝する」といつてゐたさうだ。

その後、加藤寛治提督は横須賀鎭守府司令長官となり、聯合艦隊司令長官となつたが五・五・三の比率によつて、著しく海軍兵力量を減殺された帝國海軍としては、その質において米・英の海軍に對するよりほかに途はないと見て、血の出るやうな猛訓練をして、その技術の錬磨と、精神力の鍛練に全力をそゝいだ。

このためには、多くの尊い犧牲者を出したが、なかんづく昭和二年八月二十八日、美保關沖における夜間演習のさい、艦艇の衝突を起して、少なからぬ犧牲を出したことは特筆すべきことである。けれども、それは決して無意義の犧牲ではなかつた。その犧牲による經驗は、こんにち大東亞戰爭の勝因をなしてゐる。

ロンドン條約

相手が弱かつたり、正直だつたりすると、どこまでも增長して、その骨までもしやぶらうとするのが狡猾なアングロサクソンの特質である。

わが國が、ワシントン會議で正直に五・五・三の主力艦比率を受諾したことに味を占めた米・英は昭和五年一月英京ロンドンに再びロンドン軍縮會議を開いて補助艦艇の縮小を持出した。わが國から全權として若槻禮次郎と海相財部彪が出席し、時の外相幣原喜重郎らは、これも餘儀ないこととしてゐた。

加藤寛治大將は、このとき軍令部長であつたが、この上補助艦艇にまでいろ〳〵の制限を加へられては國防用兵の上に大支障を生ずるものとして極力反對した。

東郷元帥も、加藤軍令部長の主張を支持し、軍令部次長末次信正もまた加藤の主張を正當なものとして、その成立の阻止に努力した。

しかし政府はこれを容れず、幣原外相は帝國議會の豫算總會の席上で、病休中の濱口首相に代つて、畏くも袞龍の袖にかくるゝが如き言辭を弄して議會を大混亂に陷らしめたのであつた。當時、新聞記者であつた著者は、ちやうどその議場の一隅に居たが、この答辯の瞬間、幣原代理首相に對する反對黨の辛辣な罵聲怒號が爆發し、遂に議員同志の格鬪となり、幣原代理首相は、顏面蒼白となつて、輕くおのゝいてゐるのを見た。

しかし、政府は遂にロンドン軍縮會議の條約を締結し、その回訓案を發送した。

海軍の將士は皆を決して憤慨した。けれども、加藤軍令部長は涙を呑んで、じッとこれを抑へた。そして加藤軍令部長は、その回訓案が發送された後、押しかけてきた新聞記者團に對して、悲壯な口吻で次のごとく語つた。

「こんどの回訓に對しては、海軍は決して輕擧することなく、事態の推移に對應して善處することを確信する。

但し、國防用兵の責任を有する軍令部の所信として、米國案を骨子とする兵力量には同意できないことは毫も變化はない。これ、こんにちまで軍令部のとて來た態度で御承知のとほりである。

故に、こんにちの場合及び今後の推移に關しては、軍令部はその職責上、以上の所信を以て國防を危地に導かざるやう、全幅の努力を拂ふ覺悟である。」

日蓮は泣かねど涙ひまなし――と言つたが、恐らく加藤大將も、眼にこそ涙を見せなかつたがその胸中には瀧の如き涙を感じてゐたであらう。そしてその涙は、全海軍の悲憤であつた。

しんとして、この聲明を聽いてゐた新聞記者たちの眼も、いつの間にか熱く曇つてゐた。

こんにち、政府も軍も、國民も、官吏も、議會人も渾然たる融合一致のもとに、一つの大目的のために挺身努力してゐる國情に比べて、全く隔世の感がある。

政府が回訓案を送つてから間もなく、加藤軍令部長と末次軍令部次長は袂をつらねて辭職し、やがて財部海相も辭職した。

わが言論界の耆宿、德富蘇峰は、辭職した加藤大將を慰撫し、激勵する書簡に添へて、

家散千金酬士化
身留一劍答君恩

といふ詩を作つて贈つた。

加藤大將は、この詩がとても嬉しかつたといふことである。

しかし、加藤大將らによつて醞釀された米・英謀略の軍縮に反對する機運はます〳〵深化し、遂に昭和十二年自主的國防に向つて邁進することになつた。

偉大なる垂訓

軍令部長を辭して、軍事參議官に補せられた加藤大將は、よほど身輕になつたので、講演、ラヂオ放送などで熱心に皇軍の覺悟や、國民の愛國心昂揚に努めた。加藤大將は、その頃の國際情勢から推斷して、どうしても米・英との戰を不可避と見てゐた。

そしてロンドン條約の結果、何の拘束もうくることなくその兵力量を擴充しうるものは、たゞ空軍だけが殘されてゐたので、大將は特に空軍の强化に力を致した。

昭和六年、加藤大將が大村海軍航空隊を檢閲した折に行つた講演は、わが海軍航空部隊の將來を卜するものとして有名なものであるが、その結論として大將は次のやうに述べた。

「……ロンドン條約の結果、國防上の缺陷を補ふ唯一の兵力として、航空兵力を恃まねばならぬ、今日となつた以上、諸士の責務は、實に國家の安危を岐ち、國家存亡の鍵を掌握するの重大さを持つにいたつたものと深感し、切に諸士の自重と奮勵を冀ふ次第である。

これについて、世人は斯ういふことを口にする者がある。卽ち、

航空兵力が無制限である以上、無限の富を有する米國が、我に二倍三倍する飛行機を以て對抗せば、いかにしていはゆる國防の缺陷を補ふことを得るか――と。

なるほど、我に千機あれば、彼もまた千機二千機を欲するごとく、多數の飛行機を持ち得るであらう。數の上においては二倍三倍する航空兵力を準備するであらう。

しかし、戰爭の歷史といふものは、決して數の多寡のみをもつて、勝敗を決するといふことを示してをらぬ。劣勢軍必ずしも戰爭の敗衂者にあらず、優勢力は却つて統制集中に澁滯し、各個擊破の悲運に遭ふ戰例が多い。大奈翁戰爭の先例はいふに及ばずわが海軍の戰歷においてもこれを實證して餘りある。

敵の牙城を突き、敵の首將を屠つて、戰機を一擧に大捷に導く猛烈なる攻擊精神の旺溢せる信

長、謙信流の古來の戰法は、わが海軍の秘訣である。」

大東亞戰爭におけるわが海軍航空部隊は、この垂訓どほりのことを、そのまゝに行つて、そして不可能を可能とする大戰果をあげてゐる。加藤大將の大信念は、後進の海軍將士によつて、ことに遺憾なく實現されてゐるのだ。

◇

加藤大將は、ロンドン條約に關する眞相を後世に遺して、帝國海軍の參考とするため、その餘暇を利用して「倫敦條約に對する記錄」と題する浩瀚な原稿を書いてゐたが、それを脫稿した昭和十四年一月三日、熱海の朝夷別莊で腦溢血を起し同月九日不歸の人となつた。享年七十一。

奉職實に約半世紀、まことに純忠至誠の典型的武人であつた。そして、それが直接間接に及ぼした偉大なる感化は、わが無敵海軍の血となり、肉となつて傳へられてゐる。

昭和十七年八月十七日 初版印刷
昭和十七年八月二十日 初版發行
(五・〇〇〇部) 定價 金一圓五十錢

(認承協文出 あ110294)

著作者 永松淺造 東京市麴町區麴町三ノ十二
刊行者 廣安與三右衞門 東京市麴町區麴町三ノ十二
發行所 東水社 振替東京七壹貳九七 電話九段(二五九〇番 四三一〇番) 東京市麴町區麴町三ノ十二
印刷者 東水印刷所 代表者 清水一二
東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社
會員番號 日本出版文化協會 一二〇一一六

東水社出版名著圖書目錄

詔勅講究所長
森　清人著　**皇國の書**（改訂增補版）
B6判三三〇頁　一・五〇〒一五
舊版を捨てゝ茲に大東亞の指導者たるの指導原理を示した出版界稀有の良書にして思想錬成の教科書

海軍中將
植村茂夫著　**海軍魂**（日本海軍はなぜ強いか）
B6判三二六頁　一・五〇〒一五
見敵必滅無敵海軍は日本を世界一の强國たらしめた。なぜ强いか？著者は感激に燃えて答へられた書

陸軍中將
和田龜治著　**陸軍魂**（日本陸軍はなぜ强いか）
B6判三二〇頁　一・五〇〒一五
本書は陸軍の長老和田閣下が畢生の心魂を傾けてものせる我無敵陸軍の眞髓を快明せる國民皆讀の書

元淺間丸船長
安東陽一郎著　**船は鬪ふ**（船長の手記）
B6判三一九頁　一五〇・〒一五
海を支配する者は世界を支配する言に違はず茲に海と船との生ける記錄を發表した明日の海の羅針書

松波治郎著　**劍と人**（隨筆）
B6判三一九頁　一・五〇〒一五
劍人一如の妙技、三尺の秋水に秘めた劍聖の逸話と活殺劍の奥儀に觸れた興趣盡きぬ心身教材の書。

永松淺造著　**くろがねの父**
B6判三二〇頁　一・五〇〒一五
無敵海軍を育てた人々とも題すべき書で海の先覺者猛將の海軍精神を小說風に傳へた稀有の快著。

松波治郎著　**日本名將傳**
B6判三一九頁　一・五〇〒一五
大東亞共榮圈建設の任にある日本國民の一人々々に溫故知新の道を敎へる絕好無二の心の糧である。

陸軍中將
江橋英次郎著　**航空魂**（九月出來）
B6判三二〇頁　一・五〇〒一五
我荒鷲の世界に君臨せる敢鬪精神の恐るべき嚴肅性と其神技は大東亞に敵影なし。見よ此の航空魂を

932
E
94

東水社刊
¥1.50